

58-172



1200501269323

58  
2



始





醫學博士 西村美龜次郎著

耳鼻咽喉の病と眼

(全)



發行所 究原社

目次

緒言

最も多く耳鼻咽喉病の原因をなす眼病瀰蔓性角膜表層炎の眼症状……………四

實例

第一例 鼻がつまり濃厚の鼻汁が出で同時に頭痛のあつたもの……………九

第二例 鼻がつまり又青色を帯びた鼻汁が多く出で且睡眠中口を開いて居たもの……………一三

第三例 感冒後から鼻がつまり鼻汁が出る様になつたもの……………一六

第四例 神経衰弱と同時に鼻がつまり又濃厚の鼻汁が出てゐたもの……………一九

- 第五例 甚しき鼻汁漏出と同時に激しい肩の凝りのあつたもの……二四
- 第六例 甚だしき鼻腔閉塞症あり睡眠中口を開いて居たもの……三〇
- 第七例 鼻腔閉塞あり又事務に疲労し易く且食欲減退のあつたもの……三四
- 第八例 鼻のつまりる爲食事をするに甚しく苦んで居たもの……三八
- 第九例 鼻がつまり勉強が續かなかつたもの……四一
- 第十例 甚しき鼻のつまりと同時に嗅覺の消失してゐたもの……四四
- 第十一例 嗅覺消失及び鼻腔閉塞と同時に肩の凝りがあつたもの……四七
- 第十二例 鼻腔閉塞及び嗅覺減退と同時に便秘のあつたもの……五〇
- 第十三例 幼時より嗅覺の甚しく鈍であつたもの……五五
- 第十四例 嗅覺の消失と同時に重症の神経衰弱のあつたもの……五八

- 第十五例 重症の耳鳴と同時に月經困難症(腰及び下腹部の痛み)あり又電車に暈ふてゐたもの……六一
- 第十六例 片方の耳鳴と同時に其側の偏頭痛あり又甚しき便秘のあつたもの……六七
- 第十七例 片方の耳鳴と同側頭部の鳴り及びフラツキのあつたもの……七〇
- 第十八例 十年に亘る常習鼻出血伏し向き睡眠及び勉強を嫌つて居たもの……七三
- 第十九例 聲の嘎れ 不眠症及び激しい肩の凝りのあつたもの……七六
- 第二十例 聲の嘎れ 鼻のつまり及び鼻汁漏出のあつたもの……八〇
- 第二十一例 甚しき聲の嘎れ 片側の頭痛それと同側の耳鳴及び同

- 側臀部に激しい冷感のあつたもの……………八三
- 第二十二例 甚だしき難聴 耳鳴 嗅覺消失あり 又全身の搔痒 腰及び下腹部に強き冷感のあつたもの……………八八
- 第二十三例 鼻出血と同時に夜中夢中に恐怖して室内を歩き廻つて居たもの……………九一
- 第二十四例 耳ダレと同時に就眠の甚だ悪るかつたもの……………九四
- 第二十五例 耳ダレがあり甚だしく落付きなく又金錢を浪費して居たもの……………九七
- 第二十六例 扁桃腺の肥大があり又勉強時顔に逆上して居たもの……………一〇四
- 第二十七例 年に二三次發熱と同時に扁桃腺の腫脹のあつたもの……………一〇九
- 第二十八例 發熱 扁桃腺腫脹 頭痛及び食慾減退のあつたもの……………一一二

- 第二十九例 讀書疲勞 心悸亢進 胸部苦悶及び扁桃腺の腫脹のあつたもの……………一一六
- 第三十例 約二ヶ年間に三度難聴（耳の聞えの悪い事）の起つたもの……………一二七

# 耳鼻咽喉の病と眼

醫學博士 西村美龜次郎著

## 緒言



余は大正十一年六月重症の心悸亢進と眩暈（フラツキ）を患つたが、其症状は甚だ激烈で、一時は自分の診療所をも閉鎖しやうかと思つた位であつた。内科の診察を受けたが、其原因が認められなかつた。余は兼て眼性神経衰弱に就て研究して居たので、内科的に原因がない様であれば或は眼から來て居る神経症状でないかと考へた。それで眼には何等自覺症はなかつたが、念の爲自ら檢

診を行つて見た所、圖らずも左眼に瀰蔓性角膜表層炎ビマンセイカクマクヒョウウウエンなる一種の角膜（黒玉）病があつた。依つて之に對する眼の處置をなしたるに、さしも激烈であつた心悸亢進と眩暈は、約一ヶ月後に全治した。余は此偶然の自己體驗に依り、瀰蔓性角膜表層炎なる眼病に因り重症の心悸亢進と、眩暈が起る事を發見した。之を動機に爾後熱心に眼疾患殊に本眼病と、全身に於ける諸種の病症との關係に就て研究をして居るのであるが、其結果神經衰弱は勿論、從來全く他科のものと思はれてゐた種々の病症が、眼から來て居るものである事を知つた。之に就ては或は醫學雜誌に、或は醫學會に二十回餘に亘り、學術的の報告をした、又通俗的には大正十三年「通俗神經衰弱病者の參考に」なる一書を書き、眼病殊に瀰蔓性角膜表層炎から來る神經衰弱に就て記載した。其後又「夜尿症の原因と其養生法」「神經痛リウマチスと眼」なる二種の著書をなし、之等の病症が

眼から來て居るものである事を記述した、余は又此研究に依り種々の鼻、咽喉疾患が眼に原因して起る事を知つた。而して余が昭和二年醫學雜誌上に發表した「神經衰弱の原因に就て論ず」の論文に於て、鼻咽喉疾患と神經衰弱の原因的關係に就て肥厚性鼻炎、鼻中隔彎曲症、鼻茸、副鼻腔蓄膿症例へば上顎腔蓄膿症及び扁桃腺肥大は、神經衰弱の増悪或は新らしき神經症狀を發生する事もあるも、神經衰弱の根本原因をなさない、其際に於ける神經衰弱は、眼疾患殊に瀰蔓性角膜表層炎を根本原因とする眼性のものである。而して從來神經衰弱の原因をなすものと思はれて居る之等鼻、咽喉疾患其ものが、眼性神經性血行障害の爲に起るものであるとの説を述べて置いた。余は尙其後の研究に依り獨り鼻咽喉疾患のみならず、喉頭及び耳の病症が又眼から來る事を經驗した。余の見るところでは種々の耳鼻咽喉疾患が其科に於ての局所治療に依り治せず、又は

假令一時治すとも屢々其再發を來すのは、其發生の根本原因が眼にあるからである。即ち如何に局所の治療、例へば手術をしても眼に其病の製造元が存して居るからである、余の得たる眼の治療に依り耳鼻咽喉病の顯著の輕快又は全治した實例は甚だ多數に上つてゐる。而も其多數は耳鼻科に於ける局所治療が無効であつたものである、茲に本書を書き同病者の參考に供する次第である。

### 最も多く耳鼻咽喉病の原因をなす

#### 眼病瀰蔓性角膜表層炎の眼症状

本眼病の本態は、之を分り易く云へば角膜(黒玉)表層部の濁濁である。物に警ふれば透明な硝子に呼氣を吹きかけた様なものである、此病變に因つて起る眼其ものゝ自覺及び外觀上の症状に就て、注意すべきものを擧ぐれば左の如く

である。

#### 一、眼が悪ういと云ふ自覺がない。

之は甚だ多い事である、多年本眼病を有して居りながら、少しも眼が悪ういとは思はなかつたと云ふ例は、余の屢々經驗した事である。之は前記本病の本態である角膜表層部の濁濁が甚だ輕微で、眼科専門家でも餘程注意して精細に檢診せぬと、之を看過する事が有り勝ちの様な場合が多い。病變が斯く甚しく輕微であれば之に因て起る症状も亦甚だしく輕微であと云ふ事になり、患者が之を自覺しないといふ事になるのである。従つて本眼病は、眼に自覺症がないからと云つて之を否定してはならぬ。

#### 二、外觀上にも眼が悪うい様に見えない。

眼瞼の腫脹マクハレとか、眼球結膜(白玉)の充血とか云ふ様な事もなく、奇麗な目付



をして居て家族の者が見ても、何等眼に異状がある様に思へないと云ふ様な場合が甚だ多い、之も本病の本態である角膜の溷濁が甚だ輕微である事が多いからである。

### 三、羞明（マブシー）

自覺症として最も多い症状である、時々晴天の日には眼を充分に開いて歩けないと云ふやうな、強い羞明のある者もあるが、多くは輕微で問はれて始めて氣付くと云ふ程度である。

### 四、寒い風にあたると涙が出る。

五、永く讀書して居ると涙を催し、或は眼に多少の痛みを感じる。

六、讀書時文字が霞すんで来る、又は二重に見えたり、行を間違へたりする。

七、夜間歩行中電燈を見ると光線が放散して見える。

八、眼前に種々の色の種々の形のものが浮動して見える、例へば石鹼玉の如きもの、又は殆んど無色の絲の如き形のもの、或は蚊が飛んで居る様なもの等種々である、本症状は從來多く眼底病の症状と見られて居るが、瀰蔓性角膜表層炎にも屢々來るものである。

### 九、眼球結膜（白玉）が黄色を帯びて居る。

本症状は小兒期には殆んど無いが、成年殊に年長者には可なり多い。

### 十、角膜（黒玉）の光澤がよくない。

十一、眼球結膜が常に多少充血して居る。

十二、眼球結膜が平素は普通であるが、永く讀書して居ると充血して來る。

### 十三、瞬目マブキが多い。

十四、瞼裂（眼の開き）が充分でない、何となく羞明マブシさうな眼つきである。

## 十五、視力減退

精細に検査すれば多少は必ずある、併し前に述べた様に本眼病は眼其もの、變狀が甚だ輕微である事が多いから、其視力減退も亦輕微であつて、患者が之を自覺しないと云ふ場合が甚だ多い。視力表で一、二又一、五も可なり讀める者が少なくない、斯様な場合には患者は視力減退を感せないのみならず、視力の良いのを自慢して居る事が多い、治療により尙一層良い視力が出て始めて減退して居た事を氣付くと云ふ有様である。併し又甚しき減退を來たす事もあつて其程度は種々である。

## 實 例

## 第一例 鼻がつまり濃厚の鼻汁が出で

## 同時に頭痛のあつたもの

十三歳の男子 本患者の親戚の者が、余の許に通院して居た或患者の家族から上顎腔蓄膿が、眼から來るとの余の説を傳へ聞き、其親戚の者に連れられ全く蓄膿症の爲來院したのであつた。

五歳の頃から鼻がつまる、又濃厚で黄色の鼻汁がよく出る、四五年前から勉強して居ると頭痛がして來る、二三年前からは毎日頭痛がある様になつた、又頭が重い、急に立上る時等にフラキを感ずる事がある。約十日前に某耳鼻咽

喉科の診察を受けた所、兩方の上顎腔の蓄膿症があると云はれた、併し未だ年少なので手術は出来ないと言はれ、膿を注射器で取出して貰つた。而して十日許り通院した、多少鼻の通りはよくなつたが充分でない。眼は體操の時に羞明の感があるといふ位で、其他には特別の症狀を訴へない。

眼の檢診を行つて見るに、視力は兩眼共一・二弱と云ふ良い視力であつたが尙輕微の瀰蔓性角膜表層炎を有して居た、之に對し點眼及び翳法を施した。

經過 甚だ良好で第三日來院しての報告に、鼻のつまるのが大變良くなつた今迄鼻をかんでも容易に出なかつたが、それが氣持よく出る様になつた、黄色の鼻汁であつたのがその黄色が殆ど去つた、又頭痛と頭の重い事が翌日より輕快して來た、第五日、鼻のつまる事が治した、第九日、鼻の具合が益々良くなつて來た、鼻汁の出るのが大に減じた、眼治療前には一日に九度位とつてゐた

がそれが半分より減じた、第十一日の八月二十一日續いて鼻がつまりやすく通る、鼻汁の出るのは未だ全くは止まらぬが、著しく減じた、又二三年來の常習の頭痛が全治した、附添つて來た親戚の者も、其經過の良いのを非常に喜び、而して患者の蓄膿症が全く眼から來て居たものである事を充分承知した、同日眼鏡検査をなしたるに、亂視鏡が多少應じたので、それをかける様に命じた。斯く頭痛が全治し鼻のつまる事がなくなり、又鼻汁の出る事も大いに減じたこと云ふ非常に良好の成績を得たこと、學校の始まるのが近づいたので、其後間もなく通院を中止し、神戸の近くの親戚の家から郷里の田舎に歸つた。

本例に於て最も注意すべき事は、患者が耳鼻科の診療を中止して、上顎腔蓄膿症の爲眼の診療を受け、而も耳鼻科に於ての局所の治療よりも迅速に甚だしく良好の經過を取り、それが確かに眼から來てゐたものである事が證明された

事である。又多年の頭痛が眼治療開始の翌日より輕快を來たし、十日後に全治の状態に達した事も大に注意すべき事である。上顎腔の蓄膿症があつて、頭痛があること、其頭痛は蓄膿症から來てゐるものであらうと考へるのが普通であるが、余の經驗する所では、多く本例の如く其蓄膿症も頭痛も共に眼に原因して居るものである。而して眼の治療に依り、兩方共顯著の輕快或は全治を得るものである。

本例に就て見るに、患者は五歳頃より鼻のつまりと鼻汁の漏出があつたのであるが今回眼の治療に依り其多年の鼻のつまりが全治し、鼻汁の量も大いに減じたのであるから、患者の瀰蔓性角膜表層炎は既に五歳の頃より存して居たものである。而して四五年前から多少の増悪を來し、其結果鼻の症狀の外に尙頭痛、頭重、眩暈が起つて來たのである。

本例に於て尙一言注意して置きたい事は、本患者の如く年少の者の上顎腔蓄膿症は、耳鼻科では手術はなさないのが普通であるから、幼年時の蓄膿症患者は、殊に一應眼の檢診を受けたがよい。

## 第二例 鼻がつまり又青色を帯びた鼻汁が多く

### 出で且つ睡眠中口を開いて居たもの

十五歳の男兒 患者の親が、余の許に通院中の或患者から聞き、全く鼻症狀の爲來院したのである。

八九歳の頃から鼻がつまる、殊に勉強して居るとつまつて來る。多く左右交代である。又鼻汁が甚しく出て、一日十數回ハンケチで鼻汁をこる、家族の者が其洗濯に困つて居る位である、此鼻の症狀は左側の方が甚しい、耳鼻科で兩

側の上顎腔の蓄膿症があると云はれた、多年其治療を受けたがよくない、手術をしても其全治は受合はれぬと云はれた、實に困つて居ることの事であつた。最近時々頭痛がする、又文字が二重に見える事がある、勉強に疲勞し易い、學業の成績がよくない又毎夜口を開いて睡眠して居る。

檢診して見るに視力は、右眼一・〇弱、左眼一・二弱であるが、尙兩眼に輕微の瀰蔓性角膜表層炎を有して居た、眼鏡検査をなして見たのに、兩眼共亂視鏡で多少視力が増進した。併し左眼はそれを掛ること不快があり、實用に適せないので同眼に平面鏡、右眼に亂視鏡をかける様に命ずると同時に點眼及び翳法を施した。

経過 良好で翌日來院しての報告に、鼻汁の出る事が餘程減じた、今迄午後三時頃迄に十回位取つてゐたが、本日は六回で濟んだ、第三日、鼻汁の量が益

々減じて來た、三時頃迄に五回とつた丈けである。且つ一回に出る量が今迄より少ない、鼻のつまる事も大いに良くなつた、大體に於てつまる事も、出る事も今迄の半分位になつた。睡眠中の口を開いて居る事に就いて尋ねて見たるに未だ開けて居るが、開き方が狭くなつたとの事であつた。第六日、續いて鼻汁の出る事が少ない、午後三時頃迄に四回とつた丈けである、睡眠中口を開いて居る事が、今迄は、齒も唇も共に開けてゐたのが、唇は開いてゐるが、齒は閉まつて居る、第七日、續いて睡眠中に齒がしまつて居る、頭が輕くなつて來た第十三日、鼻汁の量が益々減じた、四時頃迄に四回とつたのみである。眼治療前の三時頃迄に十回取つてゐた事に比すれば、大變な減じ方である。鼻のつまる事も續いて大いに良い。又頭の具合がよい、第二十日、午後四時頃迄に三四回鼻汁をとつたが、それが大變淡くなつた、患者は其後も尙時々通院したが、

全治と迄は行かなかつたが顯著の輕快を得、良好の成績を擧げたのであつた。  
 本例に就いて見るに、患者多年の悩みであつた鼻汁の出る事、鼻のつまる事が鼻腔の局所の治療でなく、單に眼の處置により、其處置開始の第三日より其症狀が半減したと云ふ、此急速の顯著の輕快は、其蓄膿症が眼から來て居る事を充分證明して居るのである。本患者に於ては、多年に亘る耳鼻科の治療よりは、短時日の眼の間接の治療の方が、餘程良く奏効したのである。上顎腔蓄膿の患者殊に前例の如く年少で手術の出來ない者、又は耳鼻科で經過拂々しくない者は、一應眼の檢診を受けるが良い。

### 第三例 感冒後から鼻がつまり鼻汁が出る様になつたもの

十六歳の男子 本患者の親が余の許に通院中の或患者の家族の者から聞き、母親に連れられ全く鼻の症狀の爲來院したのであつた。約五年前に流行性感冒に罹つたが、其後から絶えず鼻がつまり、又鼻汁が出る様になつた。耳鼻科では上顎腔の蓄膿症との診斷を受けたが、年少なので手術は出來ぬと云はれた、時々洗滌して貰つて居るがよくないこの事であつた。

眼に就ては何等症狀を訴へなかつたが、檢診して見るに兩眼に輕微の瀰蔓性角膜表層炎があつた、視力右眼一・二、左眼〇・九弱であつた、眼鏡検査の結果右に平面鏡、左に適應の亂視鏡を掛けさせると同時に兩眼に藥用治療を施した。

經過 翌日來院しての報告に、鼻のつまりが大變よくなつた、又出る事も著しく減じた。第三日、鼻のつまる事が益々良い、眼治療前には兩方共絶えずつまつてゐたが、今は只時々つまる位であつて、非常に氣持が良くなつた。第十

四日、鼻汁が出なくなつた、鼻のつまりる事も益々良くなつた、来院前には終日つまつてゐたが、それが朝の内僅かの間になつた、患者は茲に全治に近い良好の成績を得、非常に喜び其頃より通院を中止した。

本例に於て注意すべき事は、耳鼻科にて蓄膿症と診断された數年に亘る慢性の鼻症状が、單に眼の處置に依り其第十四日に於て全治に近い状態に達した事である。餘り迅速で又餘り顯著の奏効なので、多少不思議に思ふ者もあるかも知れぬが、原因的治療は屢々斯く良好の成績を齎らすものである。

尙注意して置きたい事は、患者の鼻の症状が感冒の後に起つた事である。感冒後の鼻の病に就ては、如何にも單に鼻だけの局所の病症の様考へられ易いが余の見るところでは感冒後の鼻の病は多く瀰蔓性角膜表層炎に因する眼性のものである、又患者の右眼は一・二の良い視力で尙病を有して居た事も注意すべきで

ある。

#### 第四例

#### 神經衰弱と同時に鼻がつまり 又濃厚な鼻汁が出てゐたもの

三十七歳の男子 患者は人より聞き神經衰弱の爲来院したのである、其主訴は不眠症であつたが、尙他の病症の有無に就て聞いて見た所鼻の故障があつたのである。

約二十年來神經衰弱に悩んで居る、其主症状は不眠症で最近では眠つたと思ふ事は三時間位のものである、就眠に一時間位かゝる、而して三時頃から目醒めそれより後は殆ど眠られない。不眠症の爲近頃は毎夜薬を飲んで居る。腦がわるくなつたと同時頃から胃の症状が起つて來た、胃痙攣と胃酸過多症がある。

又腸も多年悪く常に軟便である、又永き前から血色が悪く、三年來左下肢に神経痛がある、鼻は中學時代から濃厚な鼻汁が出る、又よく鼻がつまる、殊に讀書して居るとつまり、又鼻汁が出て来る、十年前に上顎腔の蓄膿症と、鼻茸の診断で手術を受けた、六ヶ月許りは良かったが其後は又元の様になつた。又激しい耳鳴がある、全く瀧の流れ落ちる様な音がする、眼は神経衰弱と同じく二十年前の中學時代に障子の棧が揺れてゐる様に見える、又眼前に銀色或は黒色の點状のものが見えた事がある、現在は何等自覺症はない。

兩眼に軽度の瀰蔓性角膜表層炎がある、尙他に軽度の近視がある、眼鏡検査の結果近眼鏡の外尙亂視鏡が應じたので、適應のそれ等の眼鏡處方を與へると同時に、表層炎に對し藥用治療を施した。

経過 翌日來院しての報告に、昨夜は今迄より稍々良く眠つた、今朝は平素

より頭が軽くて氣分がよい、第三日、昨夜は常に飲む藥を飲まずに寢に就いたが、四時間許り眠り一度目醒め、それから又二時間許り眠つた。今迄は藥を呑んでも三時間位眠ると目醒めて居た、斯くよく眠つた事は十年來ない事である。従つて近頃のない氣分がよい、食事の分量は同じであるが、今迄よりはおいしく食する様になつた、又便も軟便であつたのが、普通便になつた、血色が良くなつて來た、第四日前夜は一時間ばかり調べ物をしたので夢は多かつたが、今迄よりは良く眠つた、今迄は一度目醒めると容易に寢付かれないのであるが、前夜は十一時頃目醒めたが、十分位で又眠り四時半頃迄眠つた、第五日氣分が益々良くなつた、今朝は近來にないよい氣分で如何にも生れ變つた様な氣分がするとして、頭の具合が著しく良くなつた事を特に話した。第六日、藥を止めてゐるが續いて睡眠が良い、前夜など十分位で就眠した、途中で目醒め



る事はあるが、六時間位は眠れる様になつた。又神経痛がよくなつた、第七日、續いて氣分が大いによい、今迄日曜日に子供の友達が来て遊んで居ると、氣分に障り、叱つて居たが昨日の日曜には却つて之を眺めて居た位である。又今迄自分は人前で話をする事を好まなかつたが、それが、自ら進んで話す様になつたさて氣分が大によくなつた事を特に話して居た。又二日程前から鼻のつまる事が輕快して來た、今迄朝起きるとからつまつてゐたのが、朝起きた時はよく通つて居る様になつた、鼻汁が以前よりは餘程薄くなつた。又血色が大變よくなつた、本日同僚の者が自分の血色が大變良くなつたと云つて態々鏡を持つて來て、自分の顔をうつして見せてくれた程であつたさて、同僚のものも自分の血色の大變よくなつた事を認めて居る事を話した。初診時患者の貧血は實に甚しかつた、此報告に依り從來患者の血色が如何に著しく悪るかつたか、又そ

れが今回眼の治療に依り如何に著しく良くなつたか知られるのである。第八日耳鳴りが餘程よくなつた、第九日、續いて便が普通である、又今迄胃につかえる感があつたが、それがなくなつた、胃の力が強くなつた様に感じる、且全體に於て身體に力が出來た感があるさて、著しく健康を恢復した事を話した、第十三日、鼻汁の出る事が止つた、睡眠が益々良い、又胃の具合が大いに良いさて大いに喜び其頃より通院を中止した。

神經衰弱のある人は、本例の如く同時に慢性の鼻疾患殊に蓄膿症を有して居る者が甚だ多い。斯の如き場合其神經衰弱が、内科的治療で治らぬ時は、鼻から來て居るのではないかと考へるのであるが、余の見るところでは多く其鼻病も神經衰弱も共に眼から來てゐるものである。

又本例同様神經衰弱患者は、よく慢性胃腸病を有して居るものであるが、斯

様な場合には、其胃腸病が原因で、神経衰弱が起つて居ると考へるものがあるが余の見るところでは、其胃腸障害も脳の悪いのも、共に眼から來て居るものである。

尙本例に於て注意すべき事は、患者の貧血が今回眼の治療に依り顯著によくなつた事である、余の経験に依るに眼性神経性の貧血は、甚だ多いものである而も時々驚く可く高度の貧血を起すものである、余は特別の原因なく血色の悪いのは多く眼疾患殊に瀰蔓性角膜表層炎から來て居る眼性神経性のものと考へるのである。

### 第五例 甚しき鼻汁漏出と同時に激し

い肩の凝りのあつたもの

四十七歳の男子 本患者は余の許に通院して居た其親戚の者から聞き、全く上顎腔蓄膿症の爲眼の診療を受けたのである。

長き以前より常習に肩の凝りがある、患者の曰くに肩の凝りは殆ど、天性であるかと思ふ程、年少の頃からである。二十年前より時々フラツキがある、十年程前より心悸亢進がある、六年前よりそれが重くなつた、其爲登山などは出來ない、又十年來不眠症がある、三時間も就眠出來ない事がある、二三年前より記憶減退がある、例へば自分の店に使用して居る人の名前を思ひ出さぬ事がある、最近右の肩が激しく凝り、同時に其側の頸部の淋巴腺が腫脹し、同時に同側の齒齦に化膿が起つた、即ち齒槽膿漏を患つた。

鼻は二年程前から左の鼻孔から黄色の鼻汁が甚しく頻々と出る様になつた、耳鼻科で上顎腔の蓄膿と診断され其手術を受けた、少しの間は良かつたが、又

すぐ元の様に多量に出る様になつた、其後或書物で齶齒から上顎腔の蓄膿が來ると云ふ事を讀んだので、耳鼻科の治療が無効であつたので、齒科に行き先づレントゲンで齶齒との關係を検査して貰ひ、其結果二本の齶齒を抜いた。暫くの間は鼻汁の出る事が減じて居たが、三週間後に義齒を入れる頃には既に元の様になる様になつた。眼は二三年前から右眼に時々ホシが出来、治療を受けた事がある併し現時は特別の症状はない。

検診して見るに、視力は右眼一・〇弱、左眼一・二弱で健常に近い良い視力であつたが、尙兩眼に輕微の瀰蔓性角膜表層炎があつた、常用としてはそれを讀書用には、尙之に適應の凸面鏡を加へたものを裝用せしむると同時に藥用治療を施した。

経過 第三日來院しての報告に、今迄一時間に十五六回はハンケチで鼻汁を

とつて居たので、一日で大きなハンケチが殆ど全部黄色になる程多量であつた此状態が二年來持續して居たのに、眼の治療後頓に其出方が激減した、即ち第一日眼處置を受けてから入寢迄一回も鼻汁を取らずに済んだ。眼の處置をしたのが午後四時頃であつたと思ふから先づ六七時間の間、少しも、鼻汁が出なかつたと見て良いのであらうが、眼處置前の一時間に十五六回とつて居た事に比すれば實に驚く可き効果であつた。又睡眠が大いに良くなり、三十分位で就眠し且熟睡した、近來ない良い眠りであつた。翌日も鼻汁の出方が大に少なく、午後四時頃迄は殆ど出なかつた、今迄の習慣で時に鼻汁を取つたが、全く黄色が去つて普通の鼻汁であつた、四時頃から入寢迄の間には四五回とつた、併し同様黄色の去つたものであつた、今迄入寢後就眠迄の間に鼻汁が溜り、其爲就眠が防げられてゐたが、それが全く溜らなくなつた、第一日の夜同様三十分位で

就眼出來た、第三日の本日は、可なり度々鼻汁が出た、併し從來とは比較にならぬ程薄いものであつた、又肩の凝りが忘れた様に全くなつた、而して患者は眼治療直後より餘り急に又餘り顯著に鼻汁の出る事が減じたのに驚いて居り、又不思議に思つて居るとして其成績の甚だ良かった事を詳細に話した。第五日、視力検査をなしたるに右眼一・二、左眼一・五弱に増進して居た、同日の報告に前々夜四時間許り讀書し後又一時間許り書き物をした所其夜睡眠が悪しく又翌日鼻汁の出方が稍々増した、第六日、本日は朝から午後四時頃迄に一回も鼻汁が出ない、今に出るかを待つて居るが未だ出ないと、來院時の午後四時頃話して居た。茲に患者の鼻症狀即ち蓄膿症が眼から來て居たものである事が明らかに證明されたのであつた。而して患者は次の例である鼻腔閉塞に悩んで居る患者を伴ひ、余に紹介したのであつた。

本例に於て注意して置きたい事は、四時間讀書した夜の翌日に著しく減じてゐた鼻汁が稍々増した事である。四時間の讀書殊に夜間のそれが眼に障害を及ぼした事は云ふ迄もない事であつて、之は一方には、其鼻症狀が眼に原因して居る事を證する事になり、又一方には、上顎腔蓄膿の養生には眼の過勞を避くる事が必要である事を示して居るのである。尙一言して置きたい事は、既往症に於て最近右側の激しき肩の凝りと同時に其側の頸部淋巴腺の腫脹を來し、次いで齒槽膿漏を起した事である。而して經過に記した様に患者多年の肩の凝りが、今回眼の治療に依り忘れた様に良くなつたのであるから、其肩の凝りが眼から來て居た事は明らかであるが、淋巴腺の腫脹及び齒槽膿漏、或は齒齦炎が眼から來た例は、余の屢々經驗した所であるから、本患者の之等の症狀も亦眼性のものであると余は認むるものである。即ち最近何かの原因により、眼殊に右眼の

角膜表層炎の増悪を來し、其爲肩の凝り、頸腺の腫脹、齒槽膿漏が相次いで起つたものと見るべきである。俗に肩が凝ると齒がうくと云ふが、余の見る所では、それは共に眼から來て居るものである。

### 第六例 甚しき鼻腔閉塞症あり睡眠中

#### 口を開いて居たもの

四十一歳の男子 本患者は鼻腔閉塞が甚しいので、耳鼻科で手術をしやうと云ふ事になつて居た所、前例患者に勧められ、全く鼻のつまる爲來院したのである。

約二十年前から右の鼻腔がつまる。殊に製圖をして居ると激しくつまつて來て癩癢カシヤクが起つて來る、又細字を長く見て居ると同様つまつて來る、鼻のつま

る爲、四五年來睡眠中に口を開いて居る、それで口中が乾いて舌がまるで棒の様な感じがする。去年から電車に乗ると息が苦しくなつて、肩で呼吸をする様になつた、十三年前から耳鼻科の診療を受けて居るが、最近愈々手術をしやうと云ふ事になつた所へ前記の如く、前例患者に勧められ來院したのである、又四五年來右側の耳鳴がある、讀書疲勞がある、幼時より胃腸が悪い、一年程前から食慾が著しく減じて來た、二三年來不眠症があり、睡眠が淺く夜中再々目醒める、それで日中に身體がだるい、近頃右側の後頭部が痛む、眼は二十年来眼の前に無色の種々の形のものが浮動して見える、五年程前に某眼科の診察を受けたが、大した事はない、捨て置いて宜しいと云はれた、其後又某眼科の診察を受けたが別に病氣はない。老眼鏡をかければよいと云はれ、其眼鏡をかけて見たが却つて無い方が良い。

兩眼に極輕微の瀰蔓性角膜表層炎があつた、視力は右眼一・五弱、左眼一・二であつた、多少亂視鏡が應じたので、それを掛けさせると同時に點眼及び翳法を施した。

經過 第三日の報告に、第一日の夜睡眠中の口の開き方が餘程減じ今迄の半分位であつた。睡眠も今迄よりは良かつた。第二日、鼻の通りが良くなつて來た昨夜は睡眠中に口が全く閉ぢて居た。來院迄は夜中に三度位目醒め、其度毎に水を飲み舌を潤して居たが、同夜は口を閉ぢて睡眠出來たので、口中の乾きがなく一度も水を飲まなかつた、又睡眠がよく、一度も目醒めなかつたさて鼻腔閉塞の症状が顯著に輕快した事を詳細に話した。第三日、視力の検査をしたるに、右眼二・〇弱、左眼一・五弱に増進して居た。第五日、今迄業務中によく鼻がつまり、又頭痛を感じて居たが昨日はそれを感じなかつた、本日は午前中に

は其症状があつたが、午後はない又耳鳴の經過に就て述べて曰く、四五年來の右側の耳鳴が眼治療の其夜から止つた、第八日、睡眠中口を閉ぢて居る、第三十日左眼の視力が二・〇弱に増進した。鼻のつまりは續いて良い、而して耳鼻科にての手術は受けずに済んだのであつた。

余の經驗する所では鼻腔閉塞症は大抵眼から來て居るものであつて、多く本例の如く單に眼の處置に依り顯著の効果を齎らすものであるから、同症は單に耳鼻科の診療のみでなく、眼の檢診を受ける事が必要である、殊に耳鼻科の治療で經過の良くない時には尙更である、尙本例に於て注意すべき事は一・五弱一・二弱の視力が尙病的であつて、治療に依り兩眼共二・〇弱に増進した事である。

## 第七例 鼻腔閉塞あり又事務に疲勞し易く 且食欲減退のあつたもの

四十二歳の男子 本患者は事務を執るに著しく疲勞を感ずると云ふ、神經衰弱症の主訴で來院したのであつたが、瀰蔓性角膜表層炎を有して居たので、鼻の症狀の有無を尋ねて見ると、次に述べる如く甚しく之に悩んで居た事が分つたのである。

多年鼻がつまる、十年前耳鼻科で肥厚性鼻炎の診斷で其手術を受けた、一年位はよく通る様になつてゐたが、其後又再び元の様につまる様になつた、鼻で呼吸が出来ないので睡眠中に口を開いて居る、又登山などに息苦しさを感ずる此鼻のつまるのには、今迄著しく苦勞した、醫療が効かないので色々の藥を買

ひ、自ら注入なごした、多く交代につまる、それで煙草を飲んでも兩側一様に煙が出ない、何れか一方は其出方が甚だ少ない、多年肩が凝る、近來事務に著しく疲勞し易くなつた、眼は二十年前から寒さに會ふと涙が出る、最近某所で眼鏡を合せて貰つたが良くない。

一見した所では眼に異状がある様に見えぬが、精細に檢してみると兩眼に輕微の瀰蔓性角膜表層炎がある、視力は右眼一・〇弱、左眼〇・九弱、眼鏡検査の結果多少亂視鏡が應じたので、それを掛けさせると同時に藥用治療を施した。

經過 余は只一回の眼處置に依つて、鼻のつまるのが著しき輕快を來した多くの經驗を有して居るので、初診時本患者に於て眼處置をした直後、煙草を吸はしめ鼻腔のつまりの具合を檢して見た、然るに煙草の煙は兩鼻孔より一様に勢よく充分に出で、鼻孔閉塞の症狀の顯著の輕快が即座に明らかに現れた、第



四日の報告に、事務を執つても疲勞がなくなつた、又肩が凝らなくなつた、以前に比し鼻がよく通る様になつた。口を開いて睡眠する事が殆どなくなつた、再び煙草を吸はせて見たるに煙は兩鼻孔より一様に充分に出た、其出方は兩側共全く普通であつた、視力の検査をしたるに右眼は初診時と同様であつたが、左眼は〇・九弱であつたのが、一〇弱に増進して居た第七日、左右共視力が一・二弱に増進した、第十日、患者は余に食慾減退と神經衰弱の爲、約八ヶ月前より毎朝登山をして居る事を告げた、余はそれらの症状は眼から來て居るものであると思ふ、運動は却つて有害である、當分登山を中止し、眼の療養をして見たならば必ず食慾が進むであらうと話した、第十八日の報告に、其後登山を中止して居るが、今迄感じて居た胃部停滯の感が著しく減じて來た、二三年來食慾不振の爲め止てゐた朝食を、二三日前より二杯食する様になつたとて登山を中

止してから却つて胃の具合が良くなり、食慾の出で來た事を話した。第二十三日續いて朝食を攝つて居る、鼻のつまりも續いてよい、以前は何れか一方は殆ど常につまつてゐたが、それが兩側共大抵はよく通つて居る様になつた、茲に患者の鼻腔閉塞、胃症状及び事務に疲勞し易いと云ふ神經症状は、共に瀰蔓性角膜表層炎から來た眼性のものである事が分つたのである。

本例に於て注意して置きたい事は、患者が毎朝して居た登山を中止して後却つて食慾が進み朝食が攝れる様になつた事である。瀰蔓性角膜表層炎は屢々神經性に胃腸障害を起し、甚しき食慾減退を來すものである。而して本眼病性胃腸症には運動は却つて有害であるから大に注意するが良い。



## 第八例 鼻のつまりる爲食事をするに 甚しく苦んで居たもの

十六歳の男子 本患者は其親が人より聞き、全く鼻腔閉塞の爲眼の検診を受けたのである。

二年前から鼻がつまる様になり、常にクン／＼云はせてゐる、七ヶ月程前某耳鼻科の診察を受けた所、肥厚性鼻炎と鼻中隔彎曲症があると云はれた、肥厚性鼻炎の方は手術を受けた彎曲症の方も手術を勧められたが見合せた、二三ヶ月間治療を持續した、手術後少しの間、通りが良かった丈けであつた、現時も其つまり方が甚しく、食事の時の苦しさは見兼ねる位であると其母が話して居た。幼時より伏し向いて眠る、煮肴を嫌ふ肉類は甚だ好む、幼少の頃から便秘があ

ある、最近は三日に一度位の便通である、又陰氣でまるでヒステリー性の女の様である。眼は小學校に行つて居た頃から羞明がある、十三歳の時某眼科の診察を受けた所、近眼鏡をかける様に云はれた、其節近眼の他に別に眼に病氣があるとは云はれなかつた。

検診して見るに兩眼共強度の近視があつたが、尙他に極輕微の瀰蔓性角膜表層炎があつた、眼鏡検査の結果適應の近眼鏡をかける様命すると共に、表層炎に對する藥用治療を施した。

経過 大に良好であつた、第二日の報告に鼻の具合がよくなつた、又頭の具合もよくなつた、第三日、鼻の通りがよくなつた、又前夜は伏し向いて眠らなかつた、第五日、鼻のつまりが大に良くなり、クン／＼いはせる事が少くなつた。眼治療前には激しくつまるので、食事をするのに如何にも息苦し相で、共

に食事をして居て見兼ねて居たが、其苦しさが著しく減じて来た。ウツカリして居ると氣付かぬ位になつたと、鼻腔閉塞が既に顯著の輕快を來した事を其母が大に喜んで詳細に報告した。第九日、便通がよくなつて来て、五日前より隔日にある様になつた、鼻の通りは續いて良い、第十六日、其母の報告に氣分がよくなつて來た様で、動作が今迄と違つて穩かになつた、第十八日、又其母來り報告して曰く、鼻のつまる事は全治の状態に達した、食事中の息苦しさが全然なくなつた、又血色が良くなり肥滿して來た、又今迄よく鼻汁が出て居たがそれが出なくなつた、食慾が大變進んで來た、恐ろしい程で六七杯も食する事がある、便通が毎日ある様になつた、續いて氣分が快活であるとして僅かの間に性狀の一變した事を喜んで特に話した、伏し向き睡眠はまだあるが、今迄よりは少くなつた。第二十六日、其後續いて鼻の通りがよい、又氣分も快活である、

實に好成績であつた、患者は其後尙數回通院の後治療を中止した。

本例に於て注意すべき事は、今回眼の處置に依り鼻腔閉塞の症狀の全治と共に陰鬱で神經質であつた、患者の性狀が一變して快活になつて來た事である、眼性神經性に種々病的の性狀を惹起する事は甚だ多いものである、而してそは眼の治療に依り多く本例の如く好成績を得るものであるから、性狀に異狀のある場合單にそれを天性と考へず一應眼の檢診を受けるがよい。

### 第九例 鼻がつまり勉強が續かなかつたもの

十三歳の男兒 本患者は眼鏡檢定の爲來院したのであつたが、其他の病症の有無に就て聞いて見て、鼻腔閉塞で困つて居る事が分つたのである。

五歳の幼稚園に行く頃から鼻がつまる、或耳鼻科では慢性の鼻カタル又或他

の耳鼻科ではアデノイードがあるから手術をするが良いと云はれた、長らく耳鼻科の治療を受けたがよくない、両側の内何れか一方は常につまつて居る、數學の宿題などして居ると、激しくつまつて来て其勉強が續かない、時々頭痛を訴へる、物事に疲労し易い、又心悸亢進がある、眼は羞明がある、又時々痛みがある、殊に右眼、時々文字が二重に見える。二ヶ月前某眼科で眼鏡を合せて貰つたがよくない。

検診して見るに両眼に瀰蔓性角膜表層炎がある、視力は右眼〇・七弱、左眼〇・五弱兩眼共亂視鏡が應じたのでそれを掛ける様に命ずると共に薬用治療を施した。

経過 第十九日、鼻腔閉塞の症状は殆ど全治の状態に達した、今迄自宅で鼻腔に薬をつけて居たが、つけると其瞬間通りが良くなるので、よくつけてくれ

と云ふて居たが、それを云はなくなつた。視力が右眼一・〇弱、左眼一・二弱に増進した、羞明が減じた、文字の二重に見える事がなくなつた、第二十九日、今迄は鼻がつまつてくるので、數學の宿題をなすに、二題位しか續かなかつたのが、四五題續けて出来る様になつた、歩行中に時々起つてゐた心悸亢進が起らなくなつた、茲に患者の鼻腔閉塞症は、眼處置に依り眼症状の輕快と共に、全治の状態に達し、それが眼性のものであつた事が明らかに證明されたのである。

本例に於て注意すべき事は、勉強に際して鼻のつまりが激しくなつて来て居た事である。鼻腔閉塞は勉強或は讀書に際し起つて来る事が多いが、それは一方に於て其閉塞が眼から来て居る事を證する事になるのである。

## 第十例 甚しき鼻のつまりと同時に 嗅覺の消失してゐたもの

七十二歳の女子 本患者は余の許に通院して居たものから聞き、全く鼻腔閉塞の爲來院したのである。

約三年來殆ど絶えず兩方の鼻がつまつてゐる、それで食事をするのに甚だ困難して居る、又睡眠中に口を開いて居る。其爲口中が甚だしく乾燥するので、常に枕許に茶瓶を置いて、夜中三四度は、ウガヒをして居る、併し耳鼻科の診察を受けると、鼻に機械を入られるのが痛いといふ事を聞いて居るので未だ診て貰はない。又三四年來鼻が全く嗅はなくなつた、四年前に激しき下痢を患つた、其後常に腸の具合が悪く、下痢したり、便秘したりする、眼は永く讀

書して居るとクシャついて来る、其他には自覺症はない。

兩眼に瀾蔓性角膜表層炎があつた、之に對し點眼及び罌法を施した。

經過 驚くべく良好であつた、翌日來院しての報告に、昨日眼の治療を受けて歸宅後より既に鼻の通りが大變よくなつた、昨夜は、夜中一度もウガヒをせず済んだ、又眠りがよく、一度も目醒めなかつた、又今迄睡眠中に口を開いて居る爲、朝目が醒めた時口中が激しく乾いて、少しの間は發言出來なかつたが、今朝はそれがなく、従つてすぐ話しが出來た、又今迄朝濃厚の鼻汁が出て居たが、今朝は出ない、且今日は今迄よりは何となく頭の具合がよく、イキ／＼した氣持がするとして、其成績の甚だよい事を詳細に述べた、第二十六日、本患者を紹介した兼て通院中のものが來院し、本患者に就て話して曰くに本日逢つた處此通り鼻が通る様になつたとして、通して見せた。又腸の具合がよくな

つたと喜んで居たこの事であつた。第三十一日、第三回目に来院しての話に、其後續いて鼻がよく通る、食事の時の苦痛がなくなつた、又嗅覺が消失して居たので、三四年來と云ふもの良い香りのある、食物を食しても全く其香氣が分らず、又梅見に行つても梅の香が分らなかつた、最早老年であるから到底生涯治るまい、再び香を知る事が出来まいと思つて居たに、眼治療の翌日より嗅ふ様になつた。又今迄下痢があつたり一週間も便秘したりして居たのが、眼治療後は毎朝よい便通がある様になつたとて非常な喜びであつた、實に患者の重症なる鼻腔閉塞症及び嗅覺消失並に腸の障害は眼處置に依り全治の状態に達したのである。

本例に於て注意して置きたい事は、四年に亘る便通の不規則即ち慢性の腸障害が今回眼の治療により治した事である、讀者は餘り不思議に考へるかも知れ

ぬが眼性の胃腸障害は甚だ多いものである、而して眼の局所的處置は之に對し多く本例同様顯著に奏効するものである。

嗅覺の消失に就て現時それが眼から來ると云ふ事は殆ど考へられて居らない少く其藥用治療を要する眼病からの嗅覺消失は全然考へられて居らないが、余の見る所では嗅覺消失の最多數は眼病殊に瀰蔓性角膜瀰層炎から來て居る、眼性神經性のものである。

## 第十一例 嗅覺消失及び鼻腔閉塞と同時 に肩の凝りがあつたもの

四十一歳の男子 本患者は眼症狀の爲來院したのであつたが、經過に述ぶる如く其治療中に從來あつた嗅覺消失、鼻腔閉塞、肩の凝り等の症狀が、良くな

つて來た事を報告したので、それらの病症を有して居りそが又眼性のものであつた事が分つたのである。

眼に就ての訴は五六年來羞明がある、次いで涙が出る様になつた、一二年前より讀書して居ると、始めはよく見えてゐるが、暫らくすると朦朧として見えにくくなる。其時一度目を拭へば又見えて來る。

兩眼にトラホームと瀾蔓性角膜表層炎があつた、視力は右眼〇・七弱、左眼一・二であつた、點眼及卷法を施した。

經過 眼症状は漸次輕快して來た、第七日に至り患者は突然從來消失して居た嗅覺が恢復して來た事を報告して曰く、約三年來鼻が全く嗅はず便所に行つても其嗅がしなかつた、耳鼻科の診療を受けたが別に病名は云はれなかつた、治療を受けたが無効であつた、然るに本日便所に行き其嗅氣が分つたこの事

であつた、第九日、又數年來あつた鼻のつまりが輕快して來た事を報告した、曰く五六年來鼻腔閉塞があり、何れか一方は常につまつて居る、殊にうつむいて讀書其他仕事をして居ると、甚しくつまつて來る、其時一時仕事を中止して暫らく上向いてゐると再び良くなつて來る、耳鼻科の治療を受けたが良くなかつた、然るに眼の治療を始めて以來それが輕快して來た、尙嗅覺に就て報告して曰く、本日煮た芋の腐敗してゐたもの、臭を感じたとして續いて嗅覺の恢復して來た事を話した。第十一日、鼻のつまりが益々良くなつて來た、眼治療前には何れか一方は全くつまつてゐたが、左様に全くつまる様な事はなくなつた。第廿三日、右眼の視力が一・二に増進した、兩側共鼻がよく通る様になつた、又肩の凝りについて詳しく報告して曰く、肩が凝るので多年二三日目に一度は按摩をさらして居たに、眼の治療を始めてから一度もとらないとて、肩の凝りが

全治の状態に達した事を話した、第二十四日、眼鏡検査の結果亂視鏡が應じたので、それをかける様に命じた、患者は其後間もなく通院を中止した。

本例に於て注意して置きたい事は、患者の多年の肩の凝りが今回眼の薬用治療に依り全治の状態に達した事である。余の経験する所では、常習の肩の凝りの最多数は眼性神経性のものである、よく肩が凝ると眼が悪くなること云ふが、それは反対で眼が悪くなるから、肩が凝つて来るのであつて眼の方が原因である。

## 第十二例 鼻腔閉塞及び嗅覺減退と同時に

### 便秘のあつたも

二十九才の女子 本患者は眼鏡検定の爲來院したのであつたが、瀰蔓性角膜

表層炎を有して居たので、其他の病症の有無に就て聞いて見たるに、鼻の故障を始め次に述べる種々の眼性神経症を有して居たのである。

七八才の頃から左の鼻がつまる、約五年前耳鼻科で、上顎腔の蓄膿の診断を受けた、左側の方が重いと云はれた、而して兩側とも其手術を受けた、手術後暫くは通りが良かったが、又悪くなつた、電車の中で口を開いて居るのは體裁が悪いから、成る丈閉ぢて居ようと思ふが鼻がつまつて居るので、それが出来ないとの事であつた。濃厚の鼻汁がよく出る、又五年前から左の鼻が嗅はなくなつた、近頃又右の鼻も嗅覺が減退して來た、それでよく物を焦<sup>コガ</sup>して困る。余は試みに或可なり強き臭のある藥液を、しましたガーゼを嗅はせてみたが、右は僅かに感じ、左は全く感じなかつた。又幼時より便秘がある、現在三日に一度位の通じである、時々肩が凝る、約一年前より耳が遠くなつた、低い聲での

話は聞き取り難い事がある、眼は約五年前から永く物を見て居ると涙が出て来る、又痛んで来る、風に當つても涙が出る、讀書や裁縫に疲勞し易い。

兩眼に瀰蔓性角膜表層炎がある、眼鏡検査をなし適應の眼鏡處方を與ふることに同時に藥用治療を施した。

經過 余は一回の眼處置に依つても、其直後に於て既に多年消失して居た嗅覺が顯著に輕快した經驗を有して居るので、本患者に於て初診時、處置後直ちに前記處置前に、試験に用ひた藥液に浸みたガーゼを嗅せ、其嗅覺を検査して見た。然るに、處置前僅かに感じた右の鼻は強く之を感じ、全く嗅はなかつた左の鼻は瞬間的に僅かに感じた、即ち右側の嗅覺は既に顯著の、左側は僅かの恢復を見たのであつた、第二日、患者來院しての報告に、昨日眼の治療を受けての歸途電車の中で口を塞いで居る事が出来たとて早速鼻の通りのよくなつた

事を話した、又同日歸宅後に近來になく氣持よく便通があつた、今迄毎夜甚しく夢を見て居たが、昨夜は少しも夢を見すよく眠つた。鼻の通りが著しく良くなつた。又今迄鼻汁をとつても容易に出なかつたが、それが氣持よく出る様になつた、且鼻汁の出方が減じた、嗅覺は右は殆んど普通に嗅ふ様になつた、左は前日同様瞬間的に僅かに嗅ふのみである、第四日續いて鼻の通が良い、電車の中で口を閉ちて居る、續いて睡眠がよい夢を見ない、第六日、鼻の通りが益々良い、左側は今迄殆ど絶えずつまつて居たが、それが反對に時につまる位で多く通つてゐる様になつた、嗅覺は右は殆ど普通になつた、左は尙瞬間的に僅か嗅ふのみである、今迄甚だ濃厚で膿の様であつた鼻汁が、大變薄くなつて來た。續いて睡眠がよい、又便通が氣持よく毎日ある、今迄三日に一度の便通も容易に出ず、甚しく苦しんで居たが、近頃餘り樂に出るので、たよらない氣



持がする位であるとして、便通が甚しくよくなつた事を話した、眼鏡は未だ出来  
ない、第八日、鼻の通りが益々よい、兩方共殆どいつも通つて居る、嗅覺は左  
は尙瞬間的に僅かに嗅ふのみである、右は續いてよい、殆ど普通である、毎日  
便通がある、眼鏡が出来たとして本日始めて其度数の検査を求めた、茲に患者の  
多年の鼻腔閉塞及び便秘は全治の状態に達した、嗅覺は右側は殆ど全治に達し  
た、左側は只僅かの輕快であつたが、之も今少し早く眼の治療をなして居たな  
らば、よりよく恢復したのではないかと思ふのである。

本例に就て見るに患者の鼻のつまりと便秘は幼少の頃からあつたのである。  
而して今回眼の治療により何れも全治の状態に達したのであるから、患者の瀰  
蔓性角膜表層炎は、其幼時の頃から既に存してゐたものである、而して五年前  
より本眼病は、多少の増悪を來し、茲に初めて患者は眼症状を自覺したのであ

る、而して又此増悪に依り從來の鼻腔閉塞及び便秘の外に尙嗅覺や、睡眠の障  
害を發したものである。

### 第十三例

#### 幼時より嗅覺の甚しく

#### 鈍であつたもの

三十歳の男子 本患者は眼症状の爲來院したのであつたが、兩眼共後に述べ  
る如く角膜(黒玉)に病氣が有り、それは全身諸所の種々の疾患を惹起するも  
のであつたので、其既往及び現在の病症に就て尋ねて見たるに、嗅覺の障害を  
初め種々の症状を有して居たのであつた。

子供の時から嗅覺が甚だ純い、野菜類の臭などは分らぬものが多い、種類の  
異なつてゐるものは各々、それ／＼異つた固有の臭のあるべききものであると

は思つて居るが、其臭の區別の分らぬものが多い、例へば茄子と廣島菜とは臭の差がなければならぬが、それが分らない、來院數日前に新しい冷蔵庫を買つた、それに茄子の煮たのを一夜入れて置いた、翌日家族の者は、新しい冷蔵庫の臭が移つて居て食せられぬとて、食せなかつたが、自分だけは左様な臭を感せず、平氣で食した、併し便所の臭氣は分つて居る、余は嗅覺の検査の爲試みに可なり強い臭のある藥液を浸ましたガーゼを嗅はせて見たのに、多少臭がするといふ程度で甚しく嗅覺減退のある事が分つた、二十一歳の頃に兩下肢の膝關節より下部に於てシビレが起つた事がある、小學校時代から讀書に疲勞し易い、又時々頭痛がある、四五年前から腰がよく凝る、又時々肩から首筋にかけて凝つて來る、約一ヶ月前から食慾が減退して來た、又フラツキがある様になつた次いで視力減退を感じて來た。

檢診して見るに、右眼には或種の角膜炎があつた、左眼には瀰蔓性角膜表層炎があつた、各々之に對する處置をした。

經過 嗅覺の恢復は甚だ顯著であつた、初診時眼處置後直ちに處置前に用ひたと同様の藥液に浸みたガーゼを嗅はせたのに、初めの二倍以上に嗅ふとの事であつた、即ち即座に嗅覺の顯著の恢復が認められた、翌日來院しての報告に、今迄分らなかつた露フキの臭が分つたとの事であつた、再び藥液を浸したガーゼで試験をして見たが、前日より尙一層強く嗅ふとの事であつた、第三日、前夜入浴の時或日本製の石鹼と、舶來の石鹼との臭をかいでみたが、其區別が分つた、今迄はそれが分らなかつた。又來院時あつた腰の凝りがなくなつた、且フラツキがなくなつた。第五日、嗅覺が續いてよい、且今迄鼻の奥がつかつて氣分が悪かつたが、それが非常によくなつたとの事であつた。角膜病は兩

眼共餘程輕快を示した。

余の見る所では患者は既に幼時より兩眼に瀰蔓性角膜表層炎を有して居たものである。只右眼は現時は他の或種の角膜炎であるが、從來左眼同様輕微の瀰蔓性角膜表層炎があつて、それが顯著の角膜變狀を現はす、最近起つた或種の角膜炎に覆はれたものである。而して患者の嗅覺障害は固より相次いで起つた下肢のシビレ、腰や肩の凝り、讀書疲勞、頭痛、フラツキ等の前に擧げた症狀は總て之等の眼疾に依る眼性神經性のものである。

#### 第十四例 嗅覺の消失と同時に重症の

##### 神經衰弱のあつたもの

十八才の女子 本患者は神經衰弱の爲眼の檢診を求めたものであつた。來院

したのは四月であつたが、前年の十一月頃から神經衰弱に罹つた、主症狀は不眠であつたが同時に頭痛、記憶減退、フラツキ、肩の凝り、嗅覺消失、上下肢のシビレ、食慾減退、胃部停滯の感、全身の倦怠がある。嗅覺の消失は約四年前の一月頃からこの事であつた、眼は前の月に著しく流涙があつたが、現在は特別の症狀は無い。

檢診して見ると、視力は右眼一・二、左眼一・五弱であつたが、尙兩眼に輕微の瀰蔓性角膜表層炎を有して居た。右眼には多少亂視鏡が應じたので、それを左眼には平面鏡の眼鏡を掛けさせると同時に藥用治療を施した。

經過 甚だ良好で、第三日來院しての報告に、來院の其夜既に著しく良く眠つた。九時から眠り夜中一度目醒めたが、又直ぐ眠り朝六時迄眠つた、嗅覺も恢復した、然るに前夜一時間許り勉強したら所再び睡眠があしく、五時間許り

しか眠れなかつた、且今朝より再び嗅覺が消失した。第七日の報告に前回の来院後より再び嗅覺が恢復した、爾後續いて良く嗅ひ、嗅覺は健常に復した。其後睡眠もよく八時間位は眠る、肩の凝りも軽くなつた、昨日より學校に行つて居ることの事で、其神經衰弱は既に全治の状態に達した様子であつた。而して患者は其頃より通院を中止した。

本例に於て注意すべき事は、半年來の不眠症を主訴とする神經衰弱が、眼鏡と一週間足らずの眼の藥用治療に依り全治の状態に達した事、一・二と一・五弱と云ふ良い視力でありながら、尙瀰蔓性角膜表層炎のあつた事、一旦恢復して居た不眠症と嗅覺の消失が第二日の夜僅一時間の勉強に依り逆戻りした事である。即ち眼性神經衰弱症は眼症狀が、或程度の輕快を得る迄は眼を勞する事を慎まねばならぬ。

## 第十五例

重症の耳鳴と同時に月經困難症

(腰及び下腹部の痛み)あり又電

車に暈ふてゐたもの

四十三才の女子 本患者の夫は余の許で眼の治療に依り、種々の神經性の病症が治つた體驗を有して居るものであるが、患者は全く耳鳴の爲眼の檢診を求めたものである。

五年前から絶えず左の耳鳴がある、耳鼻科の診察を受けたが、別に耳に異状はないと云はれた、其後内科の診察を受けた所、神經衰弱と云はれた、四五日前から其耳鳴が殊に激しくなつて來た。それで昨日再び耳鼻科の診察を受けたが、血液循環の障害であると云はれたと、患者曰く、耳鳴の激しい事は、まる

で耳の傍で太鼓を打つて居る様で、耐えられない程である。耳鳴の始まつた頃から毎月経時の始め二日ばかり、腰部と下腹部に甚しく痛みが起つて来て、一日か二日は、いつも床に就く様になつた。又耳鳴の始まつたと同時頃から喉頭に物が込み上げて来る感がある様になつた。又二十三年前の妊娠の時から甚しく電車に暈ふ様になつた。二三丁乗つても、すぐ暈ふ。それで近い所はなるべく歩く様にして居る。十年前から肩が凝る。便秘がある、よくしびれが起る。例へば暫らく兩腕を組んで居ると既に腕がしびれて来て自由が利かぬ程である。又横臥して居ると下になつて居る身體の側面がしびれる。又少しの間坐つて居ると下肢がしびれて来るといふ有様である、不眠症がある。就眠かあしく常に夢を見る、熟睡が出来ない、頭痛がある、耳鳴の始つた頃から、手の振顫がある例へば新聞を持つて續んで居ると著しくふるえる、讀書裁縫の疲勞がある。

ある。

兩眼に瀰蔓性角膜表層炎があつた。視力右眼〇、三弱、左眼〇・四弱亂視鏡が應じたので、其眼鏡處方を與えると同時に藥用治療を施した。

經過 第四日の報告に眼治療開始後、耳鳴が漸次感じ、同日に至り全く止んだ患者曰く同日朝目醒めた時、五年來絶えずあつた、耳鳴が全く止んで居たので、餘り不思議に思ひ、家族の者を呼び起して知らせた程であつたと。又今迄朝起きた時下にして居た身體の側がしびれてゐたが、それがなくなつた。睡眠がよくなつた、今迄晝寢など中々出来なかつたが、それが出来る様になつた。又便通がよくなつた。第六日、續いて耳鳴がない、永く坐つてゐると下肢のシビレは尙起つて来るが、横臥しての身體の側面のシビレは起らなくなつた。第九日、續いて耳鳴がない、頭痛も始んどない。睡眠が大に良い、今迄夜中一二

時頃に目醒めてゐたが、昨夜は十時頃から四時半頃まで全く目醒めずに眠つた第十三日、來客があつたので永く話などした爲、折角止まつて居た耳鳴がまた起つて來た。併し以前よりは軽い、手の振顫フルヘがなくなつた。新聞を持つて讀んでも震えない。第二十一日、再發した耳鳴が殆ど止つた、只よく注意するど時々極めて軽い音が聞える位である、睡眠が大によい。第二十二日、耳鳴は前日同様時々只僅かに聞える位である。第二十四日、耳鳴が全く消失した、第三十五日、近頃は來客に接しても前の様に耳鳴が起らない。横臥しての身體のシビレ、電車に暈ふ事、手の震え共にない。第四十二日、昨日より月經が始つたが腰及び下腹部の痛みが起らない、今迄なれば其痛みの爲床に就いてゐた位で到底外出など出來なかつた。前月の月經時にも其爲二日間來院しなかつたのであるが今回は斯く本日來院した位であるとして、常になく月經時の苦痛のない事を

話した。又最近來客多く殊に泊り客もあつたが、耳鳴が起つて來ないとして愈々耳鳴に來客も障らない様になつた事を話した。第四十六日、今回の月經は愈々痛みなく濟んだ、未だ眼鏡を用ひない。第六十六日、其後續いて耳鳴が起らない、横臥時下になつた側の身體のシビレ、手の振顫共に續いて起らない、今迄甚しく電車に暈ふので思ふ所にも行けなかつたのであるが、それが暈はなくなつたので餘り嬉しく今迄訪問を受けて居ながら電車に乗れない爲に、失禮して居る家々へ訪問した、或家などは十四五年振りであつた。先方も自分が甚しく電車に暈ふ事を知つて居るので、自分の訪問を受け様とは思つて居ないので、甚だしく驚いて曰く、到底生涯來て貰えぬものと思つて居たに如何して來たかと、甚だ不思議そうに尋ねたとして、眼治療前には電車に暈ふ事が普通並でなかつた事、而してそれが大に良くなつた事を詳細に報告した。茲に患者は非常に

良好の成績を得、其後二三回来院して後通院を中止した。

耳鳴に就ては一般に、單に耳の局所の疾患或は腦の悪い爲と考へる様であるが、眼性神経性の耳鳴は非常に多いものであるから、同症に悩むものは一應眼の検査を受ける事で必要である。

婦人には月經時に本例患者の如く、腰や下腹部の疼痛又は頭痛、即ち月經困難症のあるものがあるが甚だ多い。それは多く婦人科のもの、或は内科的の神経衰弱症に考へてゐるが、余の見る所では眼性神経性のものが甚だ多い。而してそれは患者が既に有して居る角膜疾患（多くの場合瀰蔓性角膜表層炎）の月經時に於ける一時的の増悪から來る神経症狀である、眼性月經困難症に就ては余は既に醫學雜誌上に報告して置いた。

電車に暈ふ事は體質或は、内科的神経衰弱の爲と考へてゐる様であるが、之

は普通眼疾患殊に瀰蔓性角膜表層炎から來るものである、而してそれは眼の治療に依り多くの場合本例に於ける如く、全治或は顯著の輕快を得るものである。本例患者が有して居た様な身體のしびれの發生は、一般に内科的の神経症狀と考へられて居るが、余の見る所では多く眼性神経症狀である。

### 第十六例 片方の耳鳴と同時に其側の偏頭痛

#### あり又甚しき便秘のあつたもの

四十歳の女子 本患者は人より聞き、頭痛の主訴で來院したのであつた。五六年前から鼻が常に乾く、四五年前より常習に右側頭部の痛みがある、最近殊に甚しい、此頭痛の始つた頃から、同じく右側の耳鳴がある。又フラツキがある。便秘が甚しく、三日乃至一週間に一度位である、それで常に下劑を用ひて

居る、同じく四五年前から心悸亢進がある、又非常に咽が乾く、最近自動車に  
 暈ふ様になつた、又血壓が高く百九十乃至二百十である、眼は十年前から羞明  
 がある、夏季には充分眼を開いて歩く事が出来ない位である、約八年前から右  
 眼から甚しく涙が出る様になつた、多くの眼科の診療を受けたがよくない、三  
 年前同じく右眼にホシが出来た事がある、新聞や雑誌など一行読むと既に眼の  
 氣持が悪くなつて來るので讀まない、又常に眼の重い感じがある。

兩眼に瀰蔓性角膜表層炎がある、右眼は左眼より稍々重い、視力右眼一・〇  
 弱、左眼一・〇である、亂視鏡が多少應じたので、其眼鏡を掛ける様に命ずる  
 と同時に點眼及び翳法を施した。

経過 第四日、第二回目に来院しての報告に、前回来院後下劑を止めてゐる  
 が、本日自然に便通があつたとして便通の良くなつた事を話した。第十日、耳鳴

を忘れてしまつたとして其經過殊に良く、四五年来の常習の耳鳴が既に全治の状  
 態に達した事を話した。又頭痛が良くなつた。フラツキが著しく軽くなつた、  
 續いて下劑を止めて居るが毎日便通があるとして多年の便秘の治した事を話し  
 た。第十三日、鼻の乾く事が良くなつた、第三十六日、今迄は泊り客などのあ  
 つた時は殊に頭が悪くなつて困つて居たが、最近二日許り泊り客があつたが  
 障らなかつたとして、頭痛が全治の状態に達し少々の事では起らなくなつた事を  
 話し、茲に患者の四五年来の耳鳴、頭痛、便秘、鼻の乾きの症状が、眼から來  
 て居たものであつた事が分つたのである。

本例患者の耳鳴、頭痛は共に右側であるが、眼病は主として其眼と同側の身  
 體の半身に障害を及ぼすものであるから、之等の病症は主に右眼から來て居る  
 ものと見てよいのである。又本患者に於ては五六年來の鼻の乾きが、今回眼の



治療に依つて治したのであるが、此鼻症状は眼性神経性に時々發生するものである。

### 第十七例 片方の耳鳴と同側頭部の鳴り

#### 及びフラツキのあつたもの

四十三歳の男子 本患者は多年苦しんでゐた神経痛が余の許で眼の治療に依り、顯著の輕快を來した體驗を有して居る者の紹介で、不眠症とフラツキの主訴で來院したのであつた。

約十年來睡眠が悪るい、此不眠症の始つた十年前に左顔面に神経痛が起つた三年前に右上肢に同じく神経痛が起つた、最近左下肢に神経痛がある、五六年前から肩が凝る、昨年右の耳に痛みを感じた、又フラツキがある、四五日前よ

り殊にそれが甚しい、時々右の耳鳴がある、同じく右頭部にジャン／＼と蟬の鳴く様な音がする、食慾が振はない、その爲二食にして居る、眼は時に赤くなる事があるが其他には特別の自覺症はない。

兩眼に極輕微の瀾蔓性角膜表層炎があつた、視力右一・五弱、左一・〇である。眼鏡検査をなし適應の眼鏡處方を與へると同時に藥用治療を施した。

經過 翌日來院しての報告に、昨夜は今迄より良く眠つた、之迄毎夜汽車の通る音を覺えて居たが、それを知らなかつた、フラツキが輕くなつた、今迄フラツキが激しく其爲嘔氣ムカツキを催す事があつたが、左様な事がなくなつた。第三日、耳鳴がなくなつた。頭が軽い、フラツキが續いて少い、風呂に入るとよくフラツいてゐたが、昨日入浴したが其感がなかつた。又今迄來客と永く對談して居ると欠伸アツビが出て來て元氣よく話す事が出来なかつたが、昨日來院し歸宅後來客

あり四五時間對談したが、欠伸も出ず元氣よく話が出来た。又下肢の神経痛が良くなつた。第二十日、續いて耳鳴がない、フラツキも殆どなくなつた、只仰向いて物を見る時に多少其氣分がする、第二十一日、續いて睡眠が良い、汽車の通るのを知らない、茲に患者十年來の不眠症、五六年來の耳鳴及びフラツキは明かに眼から來てゐる事が分つたのである。頭の鳴る事に就ては其經過を聞き洩らしたが、頭が軽くなつたと云ふ所を見ると恐らく、それもよくなつたのであらう。

本例に於て耳鳴、頭のジャン／＼なる事、下肢の神経痛が共に右側であるがこれは主として右眼から來て居る障害と見てよい、而も其右眼が一・五弱といふ良い視力を有して居るのは注意すべき事である。

### 第十八例 十年に亘る常習鼻出血伏し向き

#### 睡眠及び勉強を嫌つて居たもの

十二歳の女兒 本患者は視力が悪るいといふ眼症状の爲來院したのであつたが、瀰蔓性角腹表層炎を有して居たので、他の病症の有無に就て聞いて見たるに鼻出血や、伏し向き睡眠等の症状のある事から分つたのである。

二歳の頃から現時に至る迄常習的に頻々と鼻出血がある、それは主に少し永く入浴した時、走り廻つた時、又朝寢起きの時である、而して主に左の鼻孔からである、四五歳の頃から常にうつむいて眠る。何處か身體が悪るいのではないかと思つてゐた。便通がよくない、隔日の事が多い、又尿意を催すと辛抱が出来難い、勉強を嫌ふ、やかましく云ふても容易にしない、物事に根がない眼は最近著しく視力減退を訴へる、勉強時に眼の痛みがある、又羞明がある。

兩眼に瀰蔓性角膜表層炎がある、他に尙近視がある、眼鏡検査をなし適應の眼鏡をかける様に命ずると同時に藥用治療を施した。

経過 第五日の報告に、便通が毎日ある様になつた、又小用が辛抱出来る様になつた。第十日、毎夜うつむいて眠つて居たのが、始めて來院の其夜よりうつむかない様になつた、又來院以來鼻出血がない、續いて毎日便通がある、第十五日根がよくなつた、續いて便通がよい、又うつむいて眠らない、鼻出血もない、今迄遊びに出て居て鼻血を出しよく鼻を壓えて歸つて來て居たが、左様な事がなくなつた。第二十二日、續いて鼻血が出ない又今迄は喧ましく云つても中々勉強しなかつたが、催促せざるもよく勉強する様になつた、續いて伏し向いて眠らない、便通も毎日ある。第二十七日、續いて催促せられずによく勉強する、第五十九日、其後續いて一回も鼻血が出ない、茲に患者十年來の鼻出



血平素の不勉強及び伏し向き睡眠が確に眼から來て居た事が分つたのである。鼻出血に就ては世人は多くは單に鼻の局所の疾患の爲又は内科的に逆上の爲と考へて居る様であるが、余の見る所では本症發生の根本原因は、多く眼疾患殊に瀰蔓性角膜表層炎である。

伏し向き睡眠は兒童殊に幼兒には甚だ多いものである、之に就ては世人は一般に身體の薄弱の爲、或は神經質の爲と考へて居る様であるが、之は眼から來て居るものである、而して眼病の治療により多く本例の如く迅速に治するものである、夜尿のある兒童には伏し向き睡眠の者が多いが、それは共に眼病から來て居るのである。

小供の勉強を嫌ふ事に就ては兩親はとかく我儘又怠慢の様考へるが、余の經驗に依るに、それは多くの場合精神的怠慢といふよりは、寧ろ眼病の爲の眼

の疲勞又は眼病に因する腦の疲勞がある爲である、而して眼の處置により本例の如く不勉強兒が勉強兒になつた例は甚だ多いのである。

### 第十九例 聲のかれ不眠症及び激しい

#### 肩の凝りのあつたもの

四十一歳の男子 本患者は人より聞き、不眠症の主訴で來院したのであつた七年前から甚しき不眠症がある、最近毎夜三四時頃迄就眠が出来ない、時には五時頃迄も眠られない、それで人の起きる頃から、十一時頃迄眠るといふ有様である、又左の肩が激しく凝る、首を動かすと音がする、又甚しい時には首が充分廻らぬ事がある、且又餘り激しく凝つて來ると其部が痛んで來る、而して二錢銅貨大の一部分に麻痺が起つて來る、後頭部の甚しい重い感がある。其爲朝起き

る時に氣をつけて靜かに起上らなければならぬ程である、急に立上る時にフラック事がある、左側上肢の諸々の關節及び同側下肢の膝關節の神経痛がある、其神経痛の爲六〇六號の注射、沃度の注射、酸素の注射、灸、温泉と殆どあらゆる治療をなした、四五年來手足の冷感がある、夏土用の内でも足袋を穿いて居る程である、歩行して居ると兩側共手が腫れて來る事がある、又齒齦<sup>ハツキ</sup>の腫れる事、齒と齒齦の間に膿<sup>ウミ</sup>が溜つて來る事がある。數年來時々甚しく聲が嘎<sup>カレ</sup>れ發聲の困難がある様になつた、其れは主に永き對談、永き讀書殊に夜トランプなどの遊びをなした時などに起る、或時など對談して居ても對者が自分の云ふ事を聞き取れぬ程激しくなつた事があつた、不眠症や神経痛の爲某病院の内科に入院して居た時に一度起つて來た其時耳鼻科の診察を受けた所聲帶の麻痺と云はれた、聲の嘎れる時には同時に肩が激しく凝つて來る、眼は十數年前から輕微

の羞明がある約六ヶ月前に某有名眼科の診察を受けた所眼鏡を処方せられた、神経衰弱のある事を話した所、それは讀書用の眼鏡の度が足りないからだと言はれた、其處方の眼鏡をかけたが神経衰弱は良くなるらない。

兩眼に遠視と輕微の彌蔓性角膜表層炎があつた、適應の眼鏡處方を與へると同時に、表層炎に對し點眼及び翳法を施した。

経過 第三日來院しての報告に、第一の夜は十一時から朝九時迄眠つた、就眠も早く十分以内に眠つた。其朝今迄常に甚しく感ずる肩と後頭部の凝りが非常に輕かつた、第二日の夜の睡眠は餘り良くなかつた、肩の凝りも前日より重い、第三十九日、總括的の報告をなして曰く、眼治療開始後は三日に二日位は十分乃至三十分で就眠出来る様になつた、良く眠つた翌日は肩の凝りも頭の具合も良い、聲の嘎れる事も今迄起つて居た様な場合でも起らぬ様になつた。第

四十八日、其後の経過に就て話して曰く、睡眠状態が著しくよくなつた、毎夜六七時間は眠れる様になつた、肩の凝りが半減して來た。肩の凝りが激しく起つて來た時にあつた其一部の麻痺の發生はなくなつた。聲の嘎れる事も其後續いて起らない。但し足の冷感はまだある、茲に患者の不眠症、聲の嘎れる事、肩の凝る事が眼から來て居たものであつた事は充分に分つたのである。斯く大體に於て顯著の輕快を得て患者は其後通院を中止した、患者は來院時には神経痛を訴へて居なかつたが、以前同人が甚しく悩んだ神経痛も必ず眼性のものであつたと思ふ。

眼病の爲聲帯に變狀を起し、發音の障害が起ると云ふ事は信じ難い様であるが、眼性神経性障害による發聲の障害例は、余の可なり屢々經驗した所である次の二例も其適例である、本例の聲帯の變狀は麻痺の様であるが、眼性神経性

血行障害の爲の聲帯の腫脹又は充血に依る發音の障害もあるであらうと思ふ。不眠症や肩の凝りが眼の處置に依り治した例は既に前にも舉げた所であるが之等の症狀は眼性に甚だ多いものである。

## 第二十例 聲の嘎れ鼻のつまり及び

### 鼻汁漏出のあつたもの

十八歳の男子 本患者は人より聞き上顎腔の蓄膿症といふ事で来院したのであつた。

五年前より時々聲が嘎れてよく發聲が出来ない事がある様になつた、其爲電話や對談に困難する事がある、六年前より鼻が甚しくつまる様になつた、其爲寢苦しく夜中二度位目醒める、又睡眠中に口を開いて居る。鼻汁が甚しく出て

日に幾回となく數へられぬ程とる、耳鼻科で兩側の上顎腔の蓄膿と診斷された。或耳鼻科で三四度洗滌して貰つたが良くない、或他の耳鼻科では手術をせねばならぬと云はれた、又少し永く坐して居ると足がつり神経痛が起つて来る、それで三十分以上坐して居る事は辛抱出来ない。四五年前から便秘があり三日に一度位である。

兩眼に瀰蔓性角膜表層炎、近視及びトラホームがあつた。眼鏡検査をなし適應の眼鏡を處方すると同時に點眼及び翳法をなした。

經過 第四日の報告に聲の具合が良くなつて來た、鼻の方もよい、殊に坐して居て足のつる事がよくなつて來た、又頭の具合が良い。第六日、來院時には兩方の鼻がつまつて息苦しかつたが、それが大に良くなり、左の鼻は既に治り、よく通る様になつた。右の方はまだ良くない、昨日頃より口を閉ぢて眠る事が

出来る様になつた、今迄常に二度位目醒めて居たが、昨夜は一度も目醒めなかつた、聲の具合は益々よく普通に復した氣がする。足のつる事も續いてない。第八日、鼻汁の出る事が著しく減じて來た。今迄日に幾度となく鼻汁をこつて居たが、昨日から本日來院時の午後三時頃迄に一度も取らない。左側は續いてよく通る。右側は尙多少つまるが良くなつた、前日は午後四時頃から八時頃迄は全くつまらなかつた。第九日、續いて鼻の具合が良い、本日は來院時の午後四時過ぎまで少しも鼻汁をこらない、聲も續いて良く出る。最近便通が毎日ある様になつた、第十三日、前夜八時頃から十一時頃迄自分が泊つて居る家の子供に讀む事や、書く事を教へてやつた所、折角止まつて居た鼻汁が再び出る様になつた。第十五日、鼻汁の出る事は再び殆ど前の如く良くなつた。第十七日、鼻の具合が續いてよく再發前と同様になつた。第二十二日、續いて聲の嘎れる

事がない、鼻のつまる事はまだ時にはあるが、大變よくなつた。患者は神戸を隔つる汽車で約十時間の遠方からわざわざ、蓄膿症の主訴で來たものであつたが此顯著の好成績を得、喜んで其後間もなく歸郷したのであつた聲帯の故障や蓄膿症のものは一應眼の檢診を受けたが良い。

## 第二十一例

甚しき聲の嘎れ片側の頭痛そ  
れと同側の耳鳴及び同側腎部  
に激しい冷感のあつたもの

六十二歳の女子 本患者は余の所に通院してゐたものから眼から聲の出ぬ事があるとの余の説を聞き、其主訴で來院したのであつた。二年程前に肺炎を患つた。其後より聲が甚しく出なくなつた。次いで左側の耳鳴がある又同側の肩

が激しく凝る、同じく同側の激しい頭痛がある又耳が遠くなつた。聲の出ぬのは殊に朝起きた時に甚しく、正午頃になると多少よくなる、二年の間に一時よく出る様になつた事もあつた、二三日前から甚しく悪るい、來院時對談しても餘程注意して聞かないと聞き取れない程であつた。食慾が甚しく悪るい、又便通が良くない、六七年來左側臀部に手掌大に甚しい冷感があつて、恰も氷を載せてゐる様な感である。それで常に懷爐を其部に當てゝゐる。只夏少しの間とるのみである。眼は一ヶ月程前から涙が出る。

兩眼に瀰蔓性角膜表層炎があり、尙他に遠視がある。適應の眼鏡處方を與へると同時に表層炎に對し藥用治療を施した。

經過 翌日來院しての報告に、前日來院する途中で或家に立寄つた、其時にも來院時と同様甚しく聲が出なかつた。眼の治療を受けての歸りに又其家に寄

つた、自分は氣が付かなかつたが、其家の者が自分が聲が出る様になつた事を知らせて呉れた。聲が出だしたので餘りの嬉しさに前夜は直ぐに寢付かれなかつた程であつた。今朝は佛壇に向ひ聲を出して念佛を唱えられたとて聲の出だした事を非常に喜んで詳細に話した、對談して見るに前日とは大變な相違で其聲は普通人と變らぬ程度であつた。頭痛も輕くなつた、食慾が大に出て來て四五年來ない色々のものを食した、殊に蓬餅ヨモギモチを二つ食したが斯様な事は近來覺えない事であるとして、食慾が急に甚しく進んで來た事を告げた、又耳の聞こえが良くなつて來た、眼治療前には自分の聲が自分の耳に餘りよく聞えなかつたがそれが良く聞える様になつた。耳鳴が輕くなつた。第三日、同日雨天で風を引いた氣味があるので聲は昨日より多少低いとの事であつたが、併し普通に近い程度であつた。第十日、其後聲は普通に出る、頭痛が大に良い又食慾が良い、



第十一日、耳鳴が七八分通り良くなった。第二十四日、續いて耳鳴が著しく軽い、便通がよくなつて多少は毎日ある。續いて食慾がよい、来院前には何を食してもおいしくなかつたが、何でもおいしく食する様になつた。第二十五日、臀部の冷感が輕快して來た。昨日眼の治療を受けて歸途懷爐の火が消えたが、以前の様に辛抱出來ぬといふ様な事はなかつた。今迄眠る迄は懷爐を入れて置くのが、前夜は入れずに就眠出來た、又昨日迄は朝目醒めるとすぐ懷爐を入れる。さうして後煙草を飲み、又便所に行く、足袋を穿くと云ふ有様で、一寸でも懷爐を離せないのが今朝は目醒めて後一時間程入れず、其儘で煙草も飲み、便所にも行つた位である。第三十日、臀部の冷感が益々良い、懷爐でなく眞綿ですむ様になつた。懷爐をおくと却つて逆上する様になり、氣持が悪るいとて冷感の甚しく良くなつた事を告げた、聲は續いて良く出る。以上経過により聲

の出なかつた事、頭痛、耳鳴、冷感、食慾減退等の症狀が、眼性神経性のものであつた事が證明せられたのである。

本例に於て對談して居て餘程注意して聞かねば聞き取れぬ程甚しく聲が出なかつたのが、歸途に既に聲が良く出た事は餘り急速の顯著の效果で、信じ難いと思ふかも知れぬが、眼性神経性の病症には斯くの如き効果は屢々あるもので決して珍らしくはないのである。

身體の局部的の冷感、可なり多い病症である。而して一般には内科的に又婦人で腰部より下部にそれのある時は婦人科的疾患に因するもの、様考へて居るが余の見るところでは、冷感の最多數は眼性神経性のものである。

## 第二十二例

甚しき難聴耳鳴嗅覺消失あり  
又全身の搔痒腰及び下腹部に  
強き冷感のあつたもの

七十五歳の女子 本患者は右眼が見えないと云ふ眼症状の爲來院したのであつたが、其他の病症の有無に就て聞いて見たるに、次に記す如く種々の病症を有して居たのである。

五十歳の頃から腰から下が甚しく冷える、それで土用の内でも常に綿入のお腰をして居る、又下腹部に時々懷爐を入れる、十年前から次第に耳が遠くなつて來た、最近は耳に口を寄せて話しても、大聲でなければ聞えぬ位である、耳の聞えが悪くなつたと同時頃から耳鳴が甚しい、殊に右側である、四五年前から嗅覺が悪くなつた、現時全く消失し便所の臭氣も感じない、左側の鼻が

つまる、時々全身に甚しき搔痒感がある。

兩眼に瀰蔓性角膜表層炎と白内障がある、右眼は失明状態で眼の前で指の數も讀めない、只手の動くのが分る位である、左眼は〇・二の視力であつた、右眼は白内障の手術をなした、又兩眼とも表層炎に對して藥用治療をした。

經過 第二十六日迄を總括して記すに手術の翌日頃から難聴、耳鳴、共に大に輕快して來た約一週間後には普通の對話で聞き取る事が出来る様になつた。親族の者の話しに今迄は耳が遠かつたので、當人に關する事を同人の居る所で話をして何事も分らなかつたのであるが、大變よく聞える様になつたので、ウツカリ話が出来なくなつたとて耳の聞えの著しくよくなつた事を殊更に告げた、難聴の輕快して來たのと略々同時頃から又嗅覺が出て來た、鼻のつまる事も大に良くなつて來た、約一週後の耳が大によく聞える様になつたと同時に冷

感が著しく輕快して来て、懷爐の必要がなくなつた、搔痒感も眼處置開始二三日後より大に輕快し、第二十六日には全治の状態に達した。又食欲が益々進んで来た、同日の話に今迄二杯の所を三杯食する様になつた、又續いて耳鳴が著しく輕い、嗅覺も可なりある、同日對談するに耳の聞えは殆ど普通状態である、鼻腔の閉塞も續いて大に輕快して居る、それより一二ヶ月後の事であつた、余が同家に往診した時、丁度大雨であつた、患者の曰くに今迄は耳が遠かつたので雨が降つて居ても音でそれを知る事が出来なかつたが、お蔭で寢て居てもそれが分る様になつたとて大に感謝して居た。

難聽は世人は一般に耳其もの、病氣の様に考へて居るが、余の見るところでは其根原は多く本例の如く眼から來て居るものである、難聽のあるもの殊に耳鼻科の治療で奏効せぬものは、眼の自覺症の有無に拘らず一應眼の檢診を受けるがよい。

搔痒感に就ては現時一種の皮膚の病症或は内科的の神經性の病氣と考へられて居るが、余の經驗する所では多く眼性神經性のものである。其發生は本例の如く全身的のもの、或は身體の或一部に限局性に來るものがある、或婦人患者は甚しき耳孔の搔痒があつたので、耳掃除をする床屋に行き、それをして貰つたが止まないこの事であつたが、眼處置に依り直ちに治したので、患者も其即効に驚きそが眼から來て居たものである事を充分承知して居た。眼性搔痒は時々甚だ激烈に來るものであるが、多く眼の局所處置により迅速に治するものがある。

### 第二十三例 鼻出血と同時に夜中夢中に恐怖して室内を歩き廻つて居たもの

六歳の男兒 本患者は眼脂メヤニが出ると云ふ眼症状で来院したのであつたが、瀰蔓性角膜表層炎があつたので、他の病症の有無に就ても聞いて見たのであつた。約二十日前から兩方鼻孔から出血する、四五日も續いて出る事がある、朝起きる時に多い、時々滴狀に流れ落ちる。約一ヶ月前から睡眠が甚だ不安で、家族の者の寢床をとる物音に夢中に起き上り眼を開き恐い／＼と云ひ室内を歩き廻る。其時電燈を消すと一層恐怖の状態を示ししがんでしまふ、斯く夢中に恐怖の動作をなす事が約十分間續く、斯の如き事が一ヶ月程の内に三四回あつた、朝起きの機嫌が甚だ悪い。又食慾が甚しく減じて來た、最近は多く一食一椀である、眼は二三日前から眼脂が出る、又軽度の羞明がある。

兩眼に瀰蔓性角膜表層炎と結膜カタルがあつた、點眼及び罌法を施した。経過 翌日其母の報告に前夜は一度も目醒めず朝迄安眠した、朝起きの機嫌

も良かつた。斯様な事は一ヶ月來ない事である、又食慾が良くなつた、今迄一杯であつたものが一杯半食した。第二十七日、眼治療開始後鼻出血が一度もない睡眠が續いて良い。以前の様に夢中に起き上り室内を歩き廻る様な事は一度もない、食慾も普通に復した。患者は其頃より通院を中止したが、それより六十一日後に再び其母に連れられて來院した、母の曰くに、其後昨日迄一度も鼻出血がなかつたが今朝あつた、前と同様に眼の爲であらうと思ひつ來院したとて前回の治療成績に依り其母も鼻出血が眼から來る事を充分承知し、今回は其出血の主訴で來院した程であつた。茲に患者の鼻出血、睡眠不安、食慾減退が眼から來て居たものであつた事が明かに證明された譯である。

夜中夢中に起き上り、恐怖の動作を爲す事は、兒童に時々見る症状であるが一般に神経質の爲とし内科的に考へて居る様であるが、余の見るところではそれは

多く本例の如く一種の眼性神経症状である。而して單に天性の神経質から來る如き事はないと信ずるのである。

## 第二十四例 耳ダレと同時に就眠の甚だ

### 悪かつたもの

十四歳の男子 本患者の父は余の許に通院し、眼の治療に依り多年あつた肩の凝り及び鼻のつまりる事が治した體験を有して居り、且其通院中他の患者の事で種々の病症が眼から來る事を充分承知して居るので、眼症状と又不眠症のため本患者を連れて來たのである。

約十ヶ月前から眼にクシャつく感がある。讀書して居ると涙を催して來る。又二三時間も勉強して居ると文字が二重に見えて來る事がある、此眼症状が始

つたと略同時頃から就眠が其だ悪くなり、寢床に入つて二時間位眠つかれない。而して朝寢をなし起しても容易に起きない、五六年來鼻汁が多く出る、殊に朝多い、三年前より鼻がつまりる。又耳だれがある、耳だれは毎年氣候の變りに起る。五歳の頃から常にうつむいて眠る、可なり前より心悸亢進がある、又血色が悪るい、時々電車に暈ふ。

兩眼に瀰蔓性角膜表層炎がある、視力は右眼〇・八、左眼〇・九弱である。眼鏡検査の結果多少亂視鏡が應じたので、其眼鏡處方を與ふると同時に點眼及び翳法を施した。

經過 翌日の報告に睡眠がよくなつた、前夜は三十分位で眠り、今朝は六時頃に起きたとて就眠も朝起きもよかつた事を話した。第三日、前夜は十分位で眠つたとて、就眠の益々よい事を告げた。第五日、其父共に來りて曰く、來院

前より左の耳から膿が甚しく出て居たのが、昨日より急に減じ殆ど出なくなつた。さて、耳ダレの激減した事を特に報告した。又鼻のつまる事がよくなつた、尙鼻汁の出る事も著しく減じ今迄の三分一位になつた、昨夜より眼鏡をかけて居る。第六日、伏し向き睡眠が餘程減じ多く横向いて眠る様になつた、就眠が益々良くなり、床に入ると直ぐ眠る様になつた。第七日、續いて耳ダレが甚だ少ない、鼻汁も少ない、又仰臥して眠る様になつた。第十八日、耳ダレが止つた、又鼻汁も出なくなつた、眼症状も顯著の輕快を來した。患者は其後間もなく通院を中止した。

耳ダレは兒童に屢々見る病症であつて、一般に其經過長く又屢々臭氣を發して困るものである。而して耳鼻科にての局所の治療が奏効しない場合が多い。余の見る所では本症も上顎腔の蓄膿症と同様大抵眼から來るものである。

本患者は五歳の頃から常に伏し向いて睡眠して居たのであるが、伏し向き睡眠なるものは眼から來るものである。従つて本患者の瀰蔓性角膜表層炎は既に五歳の頃から存して居たものである。而して五六年來多少増悪を來し其結果鼻腔に故障を起し、又耳に障害を及ぼし耳ダレを起したものである。

## 第二十五例

耳ダレがあり甚しく落付きなく  
又金錢を浪費して居たもの

八歳の男子 患者の母親が余の許に通院して居た患者で、眼の治療に依り種々の病症の治した體驗を有して居る者から聞き、落付きのない事及び金錢を浪費して困ると云ふ訴へで來院したのであつた。

生後三十日位で百日咳を患つた、三歳の頃肺炎を患つた、六歳の頃まで夜尿

があつた、鼻汁が常に出る。食物の好き嫌らひが甚しい、全く煮肴を食せない、野菜も食せぬものが多い。刺身は二人前位食する、食慾が少ない、又最近晝食はパンか芋、又は其他の間食物を食し、米飯は殆ど食せない、甚だしく落付きがない。學校成績が悪い、勉強に直ぐ飽きる、學校でよく物を忘れて歸へる雨合羽アメガッパを着て行つても歸りに雨が止んで居ると、それを忘れて歸る。又書物等も忘れて歸る事が多い。幼時より常に甚しき耳ダレがある。殊に左が甚しい、耳孔より流れ出る位である。耳鼻科の治療も受けたが尙出る、約一年前から唇の周圍から顎にかけて皮膚が赤くなる。甚しく金錢を浪費する、家人が一寸でも財布を放置して置くに直ぐそれから金を取り出し物を買ひ友達に與へる。暫らくすると歸つて來て又金を持ち出し買つては又友達に與へる、日に幾度となく斯くして金を使ふので實に困つて居る。家族に年長者が多く各自財布を持つて居るので、それを

子供の見付かる所に放つて置かぬ様に絶えず注意して居る有様であるとして、一寸でも財布を見付けると直ぐ金を取り出すので、甚だ困つて居る事を其母が特に話して居た、其爲或精神療法をした事もある。又絶えず間食をする。眼は近眼で視力の悪い事は承知して居るが、其他には何等の症狀も氣付かない。

兩眼に可なり強度の近視があつた、尙兩眼共瀰蔓性角膜表層炎を有して居た眼鏡検査の結果、近眼鏡の外に尙亂視鏡が應じたので適應の眼鏡處分を與へると同時に表層炎に對し藥用治療を施した。

經過 第三日食慾が著しく進んで來た、平素一食二杯の所を三杯食する様になつた。又前日今迄絶対に食せなかつた煮肴をつけてやつた所三分の一程食した、又今迄晝食は米飯を嫌らひ辨當も半分位しか食せず、歸つてからパンを買つて食して居たが、本日辨當に米飯を充分平素用ふる茶碗に二杯ほど入れてや

つたのに皆食して居た、而してパンを買はずに濟んだとて食慾が進み、又晝食に米飯を食する様になつた事を報告した。來院前多量に出て居た耳ダレが本日は全く出ない。甚しく出て居た鼻汁も止つた、唇の周圍の赤いのが三分の一位に減じた。第七日、續いて晝食に米飯を食しパンがなくても濟む様になつた。第八日、食慾が益々進んで來た。今朝は三杯食した、又本日晝煮着を食した、耳ダレは右は續いて止つて居る。左は本日出て居る、間食が著しく減じた、今迄絶えずそれを要求して居たが本日は來院時の午後二時迄一二度で濟んだとて、間食が大いに減じた事を其母が特に話して居た。第九日、本日は左右共耳ダレが出て居ない。母の曰くに多少落付きが出來て來た、又金錢を取り出す度數が減じて來た。第十日、今迄學校から歸ると幾度となく絶えず金を取り出し物を買つて居たのが、一二度で濟む様になつたとて、金の浪費が少くなつた事を其母が

再び報告した。著しく落付きが出來て來た、數日前迄は來院しても診察室内を彼處此處と歩き廻り、又は器物を觸り杯して一寸も靜かにして居なかつたが、それが著しく靜かになつて來た、續いて間食が少ない。又聞分けが良くなつた、本日左の耳だれが少しある。第十五日、兩側共耳ダレが全く無い、唇の周圍の赤いのが益々良い。第十六日、益々舉動が落付いて來た、診察の時に順番の來るのを母の傍に坐して待つて居る様になつて、全く人が變つた様になつた、其母の曰くに聞き分けが大變よくなつた、例へば學校の引ける頃に學校に迎いに行き、それから來院する様にして居る、それで教室の入口で母の來るのを待つて居る様に云つて置いても其場所に居らず、時には既に一人で歸宅して居る様な事もあつたが、近頃は必ず入口に待つて居る様になつた、忘れ物をする事がなくなつた、間食が益々減じた、耳ダレは右側は續いて少しも出ない。左側は本



日極少量出て居る。第十八日、耳ダレが兩方共出ない、今迄全く食せなかつた大根の煮たものを食した。第二十二日、水菜ミツナや菠稜草ホレンソウを食する様になつた。左の耳ダレは續いて出ない、右は少量出て居る。口の周圍の赤いのが全く治した。第三十二日、近頃は金錢を取り出す事が全く止んだ、それで却つて親の方から時々與へて居る位であるとして、金を取り出す癖が全く治した事を其母が大に喜んで話して居た。兩側共耳ダレが全く出ない。而して其母も耳ダレが眼から來て居たものである事を充分承知して居た。鼻汁の出る事も止つた、唇の周圍の赤いものない。續いて舉動が落付いて居る。

子供が無斷で金錢を取り出し之を浪費すると云ふ様な事は一般に天性の不良性の様に考へられて居るが、余は必ずしも左様でないと思ふ。本例の如く眼性神經衰弱性のものが少くないであらうと考へて居る、天性の不良性とのみ考へ

ず一應眼の檢診を受けるが良い。

落付きのない事は之亦天性の様に考へて居るが、余の經驗によるに、大人小人の別なく、それは多く一種の眼性神經症狀である。

食物を甚しく好き嫌らひし、殊に煮肴を嫌ふ事は兒童に甚だ多いものであるが、世人は體質の加減の様思つて居るが、之は殆ど眼性神經性のものである。而して眼の治療に依り多く本例の如く迅速に治するものである。

間食の激しいのが眼に關係があると云ふ事は、一寸信じられないであらうが眼の治療後間食の著しく少くなつた事は余の屢々經驗した所である。

口の周圍から顎の邊にかけて赤くなつて來る事は、兒童に時々見る症狀であるが、余の研究によるに眼性神經性血行障害に因するものである。

## 第二十六例

扁桃腺の肥大があり又勉強時  
顔に逆上してゐたもの

十六歳の女子 患者は視力減退の訴で来院したのであつたが、瀰蔓性角膜表層炎を有して居たので、他の病症の有無に就て聞いて見て、扁桃腺肥大及び逆上のある事が分つたのである。

四五歳の頃から両側の扁桃腺の肥大がある、それを初めて気付いたのは菓子を食べた時に咽につまる感じがした。それで家族の者が口を開かして見て、咽が甚しく腫れてゐた事が分つた、それで田舎から神戸に来て耳鼻咽喉科の診察を受けた所、扁桃腺の肥大と云はれた。爾後現時迄其肥大が常にある、而して其れは常に殆ど同程度で現時の大きさである。小學校五年生の女學校入學準備勉

強を初めた頃から、永く勉強して居ると両方の肩が凝る様になつた、六年生の頃から勉強や裁縫をして居ると逆上して来て顔が赤くなり、又熱して来る様になつた、其爲暫らく勉強を中止しなければならぬ、眼は女學校入學後から視力が減退して来た、其他には自覺症はない、近眼ではないかとの事であつた。

検診して見るに扁桃腺は、兩側共梅の實大に腫脹し、球状を爲して突隆して居る、眼は兩眼に輕微の瀰蔓性角膜表層炎と中等度の近視があつた。適應の近眼鏡の處方を與へると同時に表層炎に對し藥用治療を施した。

經過 第三日、扁桃腺の肥大が驚くべく顯著に減じた、左側は来院時の約三分の一に縮小した、最早球状の突隆を示さず只輕度の腫脹と云ふ位になつた、右側は二分の一位に縮小した、初め張り切つた球状であつたのが、しばらく来て球状がなくなつた。而して家族の者も小さくなつたと云つてゐるとの事であ

つた、又患者の曰くに眼の氣持が良くなつた、頭の具合も良くなつた。患者は初めには特に頭の悪い事を云はず、眼に就ても視力減退の外に自覺症を訴へなかつたが、治療をして見て初めて以前よりは眼の氣持がよくなつた事を感じ又頭のよくなつた事を感じたのである。即ちよくなつて見て初めて今迄視力の外に眼の悪るかつた事、又頭の悪るかつた事を知つたのであつた。斯くの如く症状の軽い時には治療に依り、よくなつて初めて以前に健常でなかつた事を知る場合が多いものである。眼鏡はまだ掛けない、本日初めて出來た。第五日、扁桃腺の腫脹が益々減じた。患者の自覺に就て聞いて見ると、咽が軽くなつた感じがするとの事であつた。第十一日、患者の曰くに顔に逆上して來る事は五六日前よりなくなつた。扁桃腺の肥大は尙稍々減少を示した、即ち左側は初診時の三分の一以下に、右側は二分の一以下に減じ、顯著の縮小を示した。患者

は其頃より通院を中止した。

扁桃腺の肥大は甚だ多い病症である、殊に小兒に多い。而かも其肥大の原因は從來不明である、前に述べた如く余は昭和二年醫學雜誌上に發表した「神經衰弱の原因に就て論ず」の論文に於て扁桃腺肥大發生の根本原因は眼に在りとの意見を述べて置いたが、多年存在せる甚しき扁桃腺肥大が今回眼の處置に依り急速に顯著の縮小を示した本例は、余の此見解を明らかに證するものである。

今茲に扁桃腺肥大と神經衰弱の關係に就て一言して置かうと思ふが、世人は同症が神經衰弱の根原をなす事がある様に考へて居る如きも、緒言に於て述べて置いた様に、本肥大は其根本原因を爲すのでなくて、單に神經衰弱の増悪又は或神經症狀を増發するのみであつて、其際に於ける神經衰弱の根原は、眼に

あるのである。従つて本肥大症の局所治療、例へば其切除を行つても、神経衰弱の全治は望み得ない。只其輕快或は或症状の消失する事があるのみに止まるのである。而も肥大其ものが眼疾に因する神経性血行障害の爲起つて居るのであるから、眼疾の存する限り再び増悪又は消失症状の再發が有り勝ちである。然るに眼の治療は其肥大及び神経衰弱の根本治療になるのであるから、扁桃腺の肥大を有するもの、殊に同時に神経衰弱のあるものは眼の治療を試む可きものである。余は前記の例に於て顔面の逆上は、或は扁桃腺肥大の切除に依つても治したかも知れないと思つて居る。即ち同腺の肥大に因つて起つた神経症状であつたかも知れぬが、眼の治療は同時に其肥大の治療となり、其縮小を來した爲其逆上が治したのではないかと思ふ。多くの場合扁桃腺の肥大に因つて發する神経症状は眼の治療により治するであらうと余は考へて居るのである。

扁桃腺肥大の局所治療としての切除手術に就て一言所見を述べて置くが、本肥大發生の根本原因は前記の如く眼にあるのであるが、眼の治療に依る眼病其ものゝ経過によつては、肥大の縮小を見ざる事は有り勝ちである。併し斯様な場合でも成年期に達すれば普通縮小するものである。而して切除手術なるものは、時に出血の爲生命を損することがあるから、肥大が餘り大きく其爲甚しき呼吸困難を起し、生命の危険があると云ふ事がない限りは、余は其切除は避けたいと考へて居るのである。

### 第二十七例 年に二三回發熱と同時に扁桃腺の腫脹のあつたもの

十七歳の男子 患者は汽車と電車で神戸より一時間餘の遠方の者であつたが

人より聞き全く發熱と扁桃腺の腫脹があるといふ主訴で來院したのであつた。

小學校に行く様になつてから、年に二、三回發熱と同時に扁桃腺が腫脹して來る。來院十三日前に某耳鼻咽喉科の診察を受けた所、學校が休みになつたら扁桃腺の手術をしたら宜しからうと云はれた。現在中學の三年生であるが、中學入學後から肩が凝る様になつた。殊に右が甚しい、小學時代には成績がよく首席で通して居た程であつたが、中學になつてから大變落ちて級で中程である最近勉強に疲勞し易くなつた、眼は時々少量の眼脂が出ると云ふ外に特別の症状はない。

檢診して見ると扁桃腺は兩側とも著しく腫脹し、梅實大に球狀に突隆し、兩側の間隙は甚だ僅かであつた。且甚しく充血を示し粘液が附着して居た、眼は兩眼に瀰蔓性角膜表層炎があつた、亂視鏡が可なり應じたので適應の同眼鏡處

方を與へると同時に藥用治療を施した。

經過 約一週後來院しての報告に、肩が餘り凝らなくなつた、勉強が續く様になつた、眼治療前には一時間位の勉強で既に疲勞して居たのが、二時間しても餘り疲勞しなくなつたとして、勉強の出来る様になつた事を大に喜んで居た。扁桃腺の状態を検するに、其腫脹が顯著に減じ兩側の間隙が二倍以上に廣くなつて居た。且充血が殆ど去り粘液の附着も殆どなくなつて居た。即ち炎衝症状が顯著に減じて居た。其後患者は來院しなかつた、それは遠方であり且扁桃腺の腫脹も大に輕快し、勉強の疲勞も大に良くなつたといふ良好の經過をとつた爲と思ふ。

本例に就て見るに發熱と扁桃腺の腫脹は、小學校時代からであるのであるが中學入學後から肩が凝ると云ふ新らしい症状が加はり、又小學校時代に比し成

績が甚しく落ちたのであるが、之は中學入學準備勉強に因る眼の過勞の爲、小學時代よりあつた瀰蔓性角膜表層炎が増悪した爲と見るべきである。小學校で優秀の成績であつたものが、中學入學後から急に成績が下り、又神經衰弱になつたといふ事は、吾人の屢々聞く所であるが、余はこれは多く入學準備勉強の爲めの眼の過勞に因る既存の瀰蔓性角膜表層炎の増悪、又は新に本角膜炎を發生した爲の眼性能力減退の結果であると思ふ。

## 第二十八例

### 發熱扁桃腫脹頭痛及び 食慾減退のあつたもの

十歳の男兒 本患者は頭痛の主訴で、其頭痛が眼の爲ではないかとの事で来院したのであつた。

五歳の頃迄時々夜尿があつた、小學校に入學した頃から三ヶ月に二度位扁桃腺の腫脹が起つて來る。それと共に發熱する事がある、來院四日前より頭痛及び嘔氣がある、且食慾が減じた、眼は學校に行く前から羞明がある、最近學校で教師の顔を見つめて話を聞いて居ると其顔が小さく見えて來る事がある。又勉強してゐると文字が二重に見える事がある、時々心悸亢進がある。

兩眼に瀰蔓性角膜表層炎があつた、視力右眼〇・七弱、左眼〇・六弱兩眼共亂視鏡で一・〇弱迄増進した、點眼及翳法を施した。

經過 第三日、頭痛及び嘔氣がなくなつた、食慾が進んで來た、初めて來院した日の朝は一杯であつたが、本日の朝は三杯食した。同日適應の亂視鏡の處方を與へ其眼鏡をかける様に命じた。第七日、續いて頭痛、嘔氣がない、且教師の顔を見つめて居て小さく見える事がなくなつた。視力が兩眼共〇・九に増進し

た茲に眼症状の輕快と同時に患者の主訴であつた頭痛が全治した。且同時にあつた嘔氣も止り、食慾も良くなつた。患者の來院は二月下旬であつたが、五月末頃迄は尙時稀に通院して居たが、頭痛、嘔氣共に起らなかつた。それより約五ヶ月後の十一月十一日母親に連れられ再び來院した、其母の曰くに、二週間程前から扁桃腺が急に腫れて來た。一週間前より著しく腦力減退の様子が見える、又食慾が減退して來た。檢診して見るに著しく輕快して居た瀰蔓性角膜表層炎が又増悪して居た、視力が右眼〇・七弱、左眼〇・九弱であつた。再び眼の藥用治療を施した所十五日後には扁桃腺の腫脹が著しく減じ、記憶恢復し、食慾亦大に進んで來た、而して通院を中止した。

本患者の母の話に依ると今迄三ヶ月に二度位扁桃腺の腫脹が起つて居たのである。然るに二月下旬來院、眼處置後は十月末に至り初めて起つたのであつて

約八ヶ月間全く其腫脹を見なかつたのである、而して今回の腫脹に際しては眼症状が増悪を來して居り、其腫脹は眼の治療に依り急速に縮小したのであるから、其腫脹が眼から來て居る事は明らかである。余は常習の扁桃腺肥大即ち慢性の同腺腫脹も急性のそれも、共に眼に因するものと認むるものである。

再發性の急性扁桃腺腫脹は、小兒は勿論成年にも可なり屢々見る症状である而して多くの場合發熱を伴ふものである。余は此急性扁桃腺腫脹に際しては、假令患者が眼の惡るい自覺がなく、又外觀上眼が惡るい様見えなくとも、精細に檢診せば必ず眼に異状があるとの確信を有するものである。而して其扁桃腺炎の根本原因は眼に在りとなすものである。

## 第二十九例

讀書疲勞心悸亢進胸部苦悶  
及び扁桃腺の腫脹のあつたもの

十五歳の女子 本患者は約一年前余の許で、眼の治療に依り心悸亢進、胸部苦悶、肩の凝り、讀書疲勞、全身倦怠、長く坐つて居て立上る時下腿（膝關節から足關節に至る部）の神經痛等の症狀が全治或は輕快した病歴を有して居るものである。今回は約一週間前より眼脂が出る様になつたと云ふ、眼症狀で來院したのであつたが、此眼症狀の發生と同時に又扁桃腺が腫脹して來たこの事であつた。

檢診してみるに、前年治療に依り余程輕快して居た瀰蔓性角膜表層炎が再び増悪して居た、扁桃腺は兩側共顯著に腫脹し、又甚しく充血を示して居た、即ち

急性の扁桃腺炎を起して居た、處置として眼の藥用治療を施した。

經過 第三日より扁桃腺の腫脹が減じた。第五日になり其腫脹が半減した。

第七日には眼症狀の顯著の輕快と同時に扁桃腺炎は殆ど全治に達した。即ち眼の局所治療は扁桃腺炎に實に顯著に奏功し前例同様同症發生の根元が、眼に在る事を證したのであつた。

扁桃腺炎は屢々再發のあるものであるが、それは多く瀰蔓性角膜表層炎が慢性に存して居り、それが氣候の關係又は眼の過勞等に因り其増悪を來たすに因るものである。

## 第三十例

約二ヶ年間に三度難聽（耳の聞  
こえの悪い事）の起つたもの



十歳の女兒 本患者の家族の者が眼から耳が遠くなる事があるとの余の説を傳え聞き、全く難聴の爲來院したのであつた。

約二ヶ年前に今回と同様に耳の聞えが悪くなつた事があつた、耳鼻咽喉科で一方の扁桃腺の手術を受けた所、手術後一週間で聞える様になつた。今回患者の來院は秋の十一月であつたが、其春に第二回の難聴が起つた。其時は第一回の時と同様に、扁桃腺の手術を受け同じく一週後に治した。家族の者の話に第二回目の手術も第一回に手術を受けたと同側であつたと思ふこの事であつた、今回の第三回目の難聴は十四五日前から始つた。患者は幼時より食事の量が少い、殊に一年前よりそれが甚しい、多く一食二杯位である。六歳頃迄は好んで魚類を食して居たが、其後より餘り好まなくなつた、野菜類も餘り食せない。鼻がつまる又左の鼻孔から鼻汁が甚しく出る、又最近以前に食して居た鶏卵を食

せぬ様になつた。眼は幼時から羞明がある、勉強して居ると涙を催して來る。

檢診して見るに聴力は、兩側共耳を隔つる約二寸位の巨離で懷中時計の音が聞える位で甚しく減退して居た、兩眼に瀾蔓性角膜表層炎があつた、視力は兩眼共〇・六である。併し一見した所では、眼は奇麗で病氣があるとは思へない状態である、點眼及び罌法の藥用治療を施した。

經過 第二日、其姉の話に今朝起きた時、話をして見るに昨日より余程良く聞える様になつたとの事であつた。檢して見ると四寸位で時計の音が聞えた、即ち前日より二倍程よく聞える様になつて居た、食慾が進んで來た。今朝は三杯食した。第三日、食慾益々進んで來た。第二日の夜は三杯、今日朝四杯、晝四杯食した。第四日、食慾が續いて大に良い、昨夜三杯、今朝四杯、又鼻のつまりる事が餘程良くなつて來た。第六日耳の聞えが大に良くなつた。兩側共二尺

五寸で時計が聞える様になつた。學校で聞えなかつた教師の話が聞える様になつた。第八日、益々良く聞える様になつた。三尺で時計を聞き得た、家族の者も患者自身も普通になつたと云つてゐた。食慾が續いて良い、第十一日、左の鼻孔から著しく出て居た鼻汁が半減した、耳の聞えは續いて大に良い茲に患者の主訴であつた難聴は殆ど普通に恢復して患者は其後來院しなかつた。

以上の治療成績に依り瀰蔓性角膜表層炎が難聴の原因をなした事は明かである。併し患者の前二回の難聴は單に扁桃腺の局所處置に依つて治したのであるから同腺も亦難聴と原因關係があるものとせねばならぬ。左れば一つの病症に二つの原因があることになり、一見不可解の様であるが、これは扁桃腺の病變其ものが眼疾患を根本原因に起つたものであつて、眼の治療は其病變が鼻咽科で局所の手術をして治つたと同程度に少く其難聴を惹起しただけの其病變が

治つたものと見ればよいのである。

尙本例に就て見るに患者は六歳頃から魚類を好まぬ様になり、最近は鶏卵を食せぬ様になつた。又從來小食であつた、斯の如き症狀に就ては世人は一般に體質の爲か然らざれば何か體內に故障があるのではないかと内科的に考へる様であるが、嗜好物の變化、少食及び食物を甚しく好き嫌らいのする事は、眼性神経性のものである。之に就ては余は學術的にも報告したのである。而して之等の症狀は眼の治療に依り多く迅速に治するのである。拙著「夜尿症の原因と其養生法」に其顯著なる治療實例が擧げてある。

## 耳鼻咽喉の病と眼終

昭和五年三月廿八日印刷  
昭和五年四月一日發行



耳鼻咽喉の病と眼

定價 金壹圓五拾錢

著者兼醫學博士 西村美龜次郎

神戸市熊内町三丁目八十番屋敷

印刷者 下間次郎磨

神戸市元町通三丁目三三五

印刷所 海文堂印刷部

神戸市元町通三丁目三三五

發行所

神戸市元町四丁目一九番  
振替大阪七二一六六番

研究社

58  
172

終